

ては、爪の磨滅度の立證には極めて價値が少い。もつと詳しく言へば、體重が重ければ重いだけ爪の磨滅は多い。歩行時踏み切りの強いもの、肢を高く揚げるもの、踏みつけ方の強いもの、繋の傾度に依る緩衝作用の弱いもの等は爪の磨滅率が比較的大である。殊に足の厚さ、趾の恰好即ち緊握の度、趾の長短、爪そのものゝ大小、更に進んで體重支持の中心位置即ち體重が爪先に落ちるか踵に落ちるか等々の如きは、爪の磨滅度に至大の關係を有するものである。擧ぐれば他にもいろいろの關係があるが、唯猫足であるか兎足であるかだけでも驚くべき差異を生ずるものである。その證據には、鑪にかけて恰も銅を削るやうな感じのする軟い爪でも、それを兎足の犬が持てば少々の運動では徒長さへもするが、これを猫足の犬が持てば、コンクリート舗装道路に於て疾走に依り一日八、九里、連續四五日もすれば、血を出す程消磨してしまふではないか。これを要するに以上述べたやうな諸條件が同等である犬を見付けるといふことは、殆んど不可能といつても差支ない。又これらの諸條件を彼是心の中で加減して判断を下さんとしても、その組合せが複雑であるから如何に判断を下してよいか分るものでない。だから歩行に依る爪の磨滅度を比較して、黒爪と茶爪の硬軟を云々する如きは、恰も痴者の夢を語るやうなものだ。それよりも、前に言つたやうに、鉄か鑪かを以て試してみる方が數百倍の確實さを持つものであると私は斷言

して憚らなう。

以上爪の色に關して要約すれば、犬體色素確保の觀點からいつても、將又質そのものゝ硬度からいつても、爪は色素の濃いものほど良いといふことになる。これに由つて私は提唱したい。我々は良血種保障の一象徴として、將來種族改良の一目標を「黒爪」に置くべきだ。即ち標準としては「爪は黒又は褐色。但し黒を良しとす」といふことを強調するものである。

爪は強大でなくてはならぬと冒頭で述べたが、第四の問題として今一度これに就て注意を喚起したい。

元來爪が硬くなくてはならぬといふことは、普通考へるやうに歩行に依る磨滅關係もあるがむしろ武器として將又工具としての觀點から一段とその必要を認めるものである。而もそれは唯質が硬いばかりでなく、大きさも大きくなくてはならぬ。その長さもできることなら或る程度の鉤状を有つてゐることが望ましい。しかしこれが爲犬の運動を控へめにせよといふのではない。無闇に爪を短く剪るなど言ふのである。蓋し觀賞犬としては、爪の短いものが見えが好いであらうが、使役犬としては望ましくない。爪が伸びれば趾の恰好を損する如く思はるゝであらうが、幼犬時はともかく、相當運動を課するやうになり、又趾の發達も進んだものには、これが爲趾の根

本的構成を害することは萬々ない。

これに關連して今一つ注意すべきことがある。他人の犬の爪を見て運動の適否を云々することは慎まなくてはならぬ。自分の犬でさへも、漫然と爪の磨減度を見て、これに依つて運動の度を規正せんとする如きは兎かく過誤に陥り易いものである。何となれば爪の磨減度は、前に述べた通り、犬體の構成に依つて大なる相異があるばかりでなく、土地の硬軟にも至大な關係があるからだ。要は爪が長いからといつて必ずしも運動の不足を證するものでなく、爪が短いからといつて安神できるものではない。

第十三章 歩 様

第一節 歩様と前軀の角度

前軀の角度—即ち肩胛骨の傾度及び肩胛骨と上膊となす角度—に關しては從來四十五度と九十九度乃至百十度を以て學理的のものとして信じられて來た。然るに近頃これに就て識者間でも疑問があるやうだ。即ち果してそれが合理的のものであるか、三大種に於て多少相異があるのではなから

うかといふのである。私の信するところに依れば、學理的な角度としてはそれでよいものであると信じて何ら疑を持たない。何となればこの角度を有つものが、歩尺を伸ばすに最も經濟的にして最も容易であることは、多くの説明を須たすして學理的に了解できるからだ。しかし實際に於ては、この角度に合するものはむしろ少いかと思ふが、それとこれとは區別して考へなくてはならぬ。言ひ換へれば、學理的な角度を理想として成るべくこれに近きことを要望すべきである。即ち肩胛骨は四十五度に近く傾き、肩胛骨と上膊骨と成す角度は九十度に近きものを良しとするわけである。

そこで第二の疑問に答へなくてはならぬ。即ち三大種それぞれ歩様—前肢の揚げ方—が異つてゐるが、前軀の角度はいづれも同様でよいといふわけに就て説明しなければならぬ。これは一寸迷ひの起り易き問題であるが、高歩と低歩との原理を知れば自ら了解せらるゝであらう、

高歩とは速歩(はやあし)に於て前肢を高く揚げるものをいふのであつて、これは肘と膝を比較的多く曲げることに依つてできる歩様である。これに反して低歩とは膝を伸ばしたまま推進するものをいふ。一般にエアデールは稍々高歩をなし、ドーベルマンはこれに亞ぎ、シエパードは低歩をなし。そこで高歩となり低歩となる原因はどこにあるかといふことが問題解決の爲

の鍵である。その原因は肩や上膊の角度に關係があるといふよりも、主として後驅の角度に密接なる關係を有つものである。このことは唯私の獨斷ではなくて、馬學に於ても認められてゐる。試に三大種に就て後驅の構成を比較してみらるゝならば成る程と頷かれるであらう。これを要するに、前驅の角度は三大種とも同等の要求を有つものであつて、いづれも歩尺を伸ばすに最も都合の好いものでなくてはならぬ。

第二節 エアデールの歩様

エアデールはシェパードに比すれば、稍々高歩をなすものであるが、前肢はどこまでも「踏み出す」べきものであつて、「踏み上げ」る風になつてはならぬ。換言すれば、歩尺を伸ばすことを主眼とするものであつて、高く踏み上げることが主張すべきものではない。然るに世間往々にして主客を顛倒するの傾があるやうだ。この點、我標準書にも「踏み上げ」と示してあるが誤解を生ぜしめ易い。これは字句に拘泥するやうであるが、元來「踏み上げ」といふことは、ダンスのハイステップや徒手體操の「脚を舉げる」動作と同じく上に舉げさへすればよいわけで、歩尺伸暢とはむしろ反對の意味を表現するものである。抑も前肢を踏み上げるものは原則として歩尺が伸び

ない。高く舉げて踏み出すものは歩尺を縮むるものではない。エアデールの歩様は當然後者でなくてはならぬ。のみならず、我々の最も警戒しなければならぬことがある―即ち前肢を無暗に踏み上げるエアデールには最も多くの場合後驅の脆弱なものがあることに、注意しなければならぬ。

元來本種の歩様は一種獨特な美しき調律を持たねばならぬものであるが、それは必ずしも肢を踏み上げることに依つて現はれるものでなくて、一舉足一投足の間に生ずるテンポの緩急變化に依つて現はれるものである。言ひ換へれば、歩の高低如何に拘らず、一舉動と次の舉動との間に緩急の變化なきものは、所謂一本調子であつて、決して調律を現はすものではない。この調子は到底筆で書き現はすことはできないが、強いて書けば、エアデールにあつては肘を多く曲げることに依つて高歩するものであつて、膝を曲げる度合は少い。而も膝をその場で曲げることなく前方に出しながら曲げる。(シェパードはむしろその場で曲げる)。曲げるや否や膝が最高所に達する前にピンと伸ばし、そしてゆとりを以て潤大に前方遠く著地する。著地するや否や恰もゴム球が弾むやうに足を地から離すといった工合である。かくすることに依つて調子の變化が現はれ、それが律動的となるのである。これを乗馬に譬へれば、かの高級馬術に於

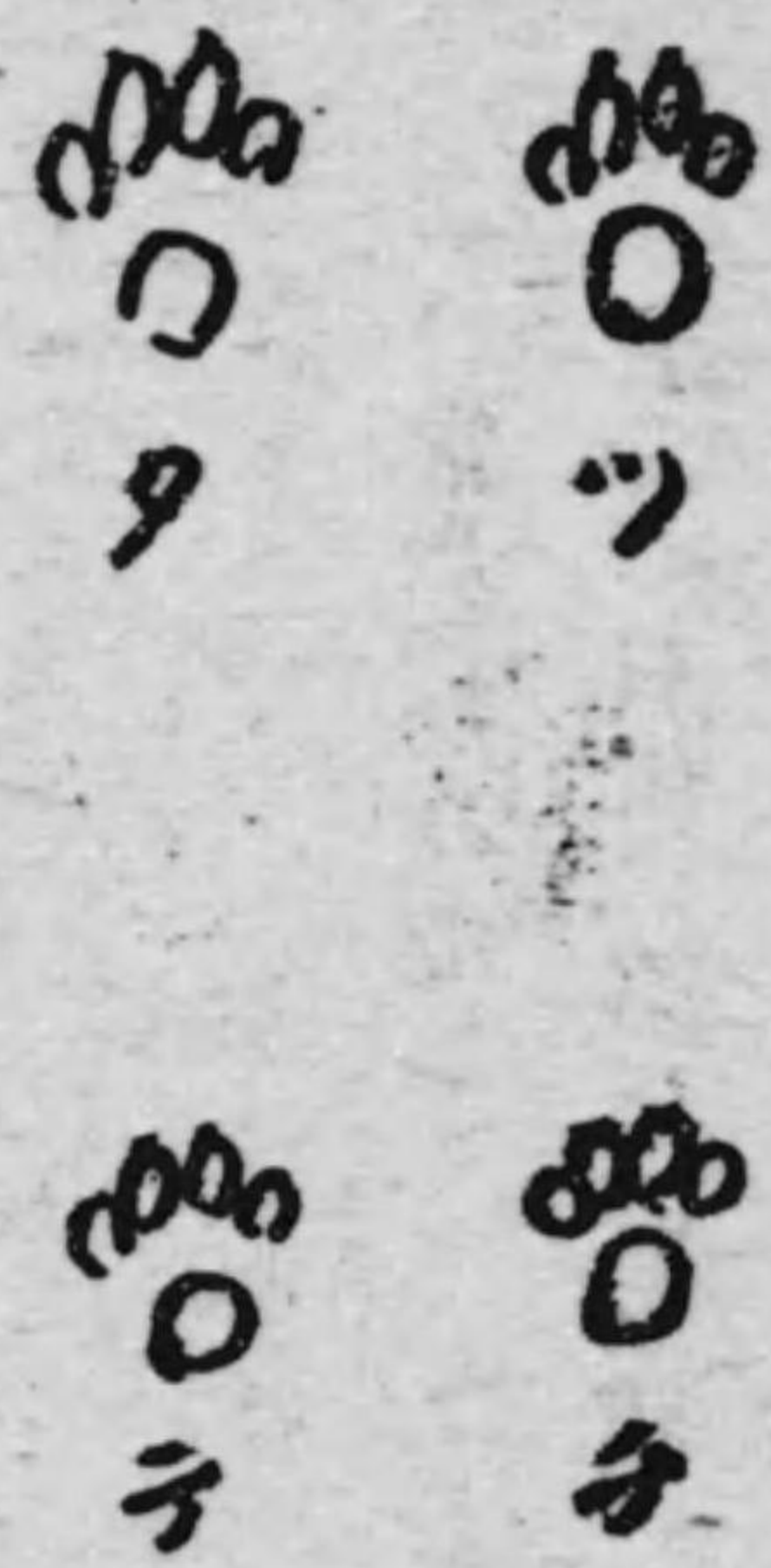
けるスペイン速歩とでもいふやうなものだ。

元來速歩に於て足が著地するや否や彈むが如くこれを地から離すといふことは美しき調律を現はすものであるが、これは歩様に於て最も大切なことである。蓋しこれは歩行力が健全にして輕快性に富むものでなくてはできないことであるからだ。而もこれは「踏み上げる」式のものでは出來なくて「踏み出す」式のものでなくては出來ないことである。エアデールの歩様に於て最も大切な點がこれにあるのではなからうか。

第三節 側對歩の原因と影響

側對歩に關してはいろいろの議論があるが、まだはつきりした定説を聞かない。で、これに就て私の所見を述べてみたい。蛇足ではあるが、順序として先づ、犬の歩法に就て説明するであらう。

一、常歩(なみあし) これは四肢を逐次に踏み出す最も遅い歩み方である。即ち、第一に左前、第二に右後、第三に右前、第四に左後といふやうに交互斜對角に従ふ四節からなる歩様である。(第19圖。以下同じ)。



第一九圖 歩法の種類



二、速歩(はやあし) これは常歩の四節を二節に縮めたともいふべき歩み方である。即ち斜對角の前後兩肢を一對として歩むものであつて、第一に左前と右後とを同時に、次に右前と左後とを同時に踏み出し同時に著地するものをいふ。

三、駈歩(かけあし) これは三節から成る急速な歩様であつて、更に分てば右手前駈歩と左手前駈歩の二通りがある。即ち右手前駈歩は第一に左後、第二に左前と右後、第三に右前といふ順序に踏出すものである。そして右手前では右側の前肢も後肢も左側のものよりも前方に出ることとなる。

四、躍歩(はやがけ)

これは最も急速なる歩様—即ち「一足飛」の駈歩である。駈歩と異なる

ところは二節から成ることである。即ち第一に兩前肢を一對とし、次に兩後肢を一對として飛躍する歩法をいふ。犬は最も急速なる前進や障礙物の飛越や襲撃等の場合急劇なる轉身等にこれを用ゐる。この歩法はとかく忘れられがちであるが、我々の使役犬の爲にはその巧拙は大切な關係を有つものであることに就て注意を喚起したい。

以上の四種が正常なる歩様であるが、犬によつては稀に常歩と速歩に於て特異な歩様をなすものがある。これを側對歩といふ。側對歩とは一寸分りにくい名稱であるが俗に「調子」とも謂ふ。これは「一側一對歩」といふ言葉を略したものと思へばよく意義が解るであらう。即ち一側の前後兩肢を一對として同時に踏み出し、同時に著地する二節の歩法をいふのである(19圖)。これは正常の歩法でないから勿論可いとは言はれないであらうが、犬の能力に如何なる程度の影響を及ぼすものであるかを検討するの必要がある。この問題を解くことは却々困難であるがその原因が何にあるか、又乗馬の側對歩のことを考へてみるならば、或る程度の結論を得ることができらうであらう。

第一知らねばならぬことは、犬は生れながらにして側對歩をなすものであるかどうかといふことである。私の信ずるところでは、生れながらにして側對歩をとるものはゐないと答へたい。何

となれば私の經驗に依れば、小さい幼犬にして側對歩をとるものを未だ曾て見たこともなければ聞いたこともないからだ。のみならず、馬に就て調べたところに依るも同様であるからだ。

馬に就て私の調べたところに依れば、軍隊乗馬の中にも側對歩をとるものが百頭に付二頭位は出るが、未だ用役に就かざる放牧馬にあつては皆無である。即ちこの側對歩は後天的の習慣に依つてできるものであることが解る。されば何故かくの如き變つた歩法のものできるのかあるか。それは軍役に就き他の馬に伍して行動するに方つて、體格等の關係よりして他の一般馬と歩度が合はない場合、常歩速歩の中途半途の歩度を以てこれに合はんとする如き關係から、いつの間にもやら變調を來たし、それが習慣づけられるものと言はれてゐる。

我々の畜犬に於てもこれと同じやうな原因によつて側對歩ができるものと考へて多分間違ひないであらう。しかし犬の場合には勿論他犬との關係でなく、連行者の歩度や操作法に關係するものであると言ふべきだ。言ひ換へれば、犬は個々別々に運動するのであるから、注意さへすれば體格の大小強弱等に何ら拘束せらるゝことはない。即ち連行者がそれぞれの犬に適應するやうに平素の指導に注意しさをすれば側對歩を誘致することはないわけだ。これが豫防に關しての細部のことは後に譲り、主問題たる側對歩が犬の能力に如何なる影響があるかを先づ片付けなくては

ならぬ。

この影響を知る爲には、實際比較試験を行ふことが最も有効な方法であるが、同等の條件を具備する試験犬―正常歩犬と側對歩犬―を得ることは容易に望むべからざることであるから致し方がない。そこで、止むなく他方面から考察しなくてはならぬ。この考察の爲最も價值ありと思はるゝものは、中古以來流行したる側對歩馬のことである。

顧るに中古以來洋の東西を問はず大に側對歩馬が流行した。態々名馬を側對歩に仕込んで乗つた理由は、多少矯奢的といふこともあつたやうだが、その主なる目的は馬背の反動を調節するといふことであつた。しかしながらこれが爲に馬の能力を左迄犠牲にしたものとは考へられない。蓋しかのナポレオンをはじめ多くの勇將豪傑たちが一國の運命を決する爲に、自ら陣頭に立つて千軍萬馬を麾いて大陸を席卷するに方り、能率を害するやうな馬を態々作つて、これに跨つたものとは思はれないからだ。ナポレオンの愛馬の如きは或はアルプスの登越に魁け、或は露都よりの退却に方つて、コザツクの急追を物ともしなかつたではないか。今日の神宮大會の馬術を見ても、側對歩馬が神速なる速力と輕快なる步調を以て妙技を遺憾なく發揮し得るのはむしろ壯觀と言はなくてはならぬ。これを要するに、馬を態々側對歩に仕込んで實用に使ふといふことは別の

意味に於て問題であるが、側對歩そのものは必ずしも健脚を害するものでなく、又駿足を傷ふものともいはれないやうだ。犬に於ても同様のことが言へるであらう。しかしながら、一つ考へなくてはならぬ問題がある。體構の不備からして自然側對歩になりがちのものがあはせぬか。もしありとすれば、側對歩そのものがよいとか悪いとかいふことは別として、その原因により犬の評價を傷つけることは言ふを俟たぬ。要はこれが鑑別といふことに存する。

こゝにいふ體構とは主として運歩に關する諸構成をいふのであるが、それに就て一々説明するわけにはゆかない。一口に言へば、運歩滯滯氣味のものには側對歩になり易いといへるであらう。かの軍隊乗馬中に偶々生ずる側對歩馬のことを考へても推察に難くない。

しかしながら、前にも述べたやうに犬は個々に運動するものであるから連行者の注意次第で側對歩は豫防することができる。されば如何なる注意を拂ふべきであるか。これを要約すれば次の通りとなる。

- 一、幼犬から未成犬時代に於て特に注意すること。
- 二、運動時常に犬の步態に注意し、步度や步調を規正すること。
- 三、長時間の運動―犬が疲勞した時―には特に注意すること。

四、不正地の運動に於ても注意すること。

これは言ふまでもなく、犬を引綱に依つて連行する場合のことであつて、犬をして自由に行動せしむるときは、犬は自然に適應する歩度を選択するものであるから、側對歩の原因を作ることには萬々ない。然るに引綱連行の場合には指導手の歩度や操作振りが犬の歩様に制扼を與へることが少くない。即ちその犬の爲に常歩には速し速歩には遅過ぎるといつたやうな状態に氣付かずして、それを続けるならば、恰も無考へな大人が小兒の手を引いて歩くやうなものだ。このとき小兒は無理して大股に歩んでみたり、チヨコチヨコ走りを混ぜてみたりするであらう。小兒は四足動物でないから側對歩となる虞はないが、犬は變調な歩み方―側對歩になるであらうことは想像に難くない。

しかしながら、犬といへども成犬となつて既に歩様が固つてゐれば、そして相當な體力ができてゐれば、指導手の歩度に順應する如く歩み得るものである。だから容易に變態的慣習に陥るものではない。然るに犬は生後凡そ一ケ年を越えなくては、成犬同様な歩行力を有つものもなく、又歩様もほんたうに固まるものでない。だから幼犬や若犬に於ては特に注意しなければならぬ。

犬は元氣のよい時又は體力旺盛のときは、その歩様に彈撥力がある。言ひかへれば、指導手の誘導に順應する力が多いものである。これに反して元氣のないとき又は疲勞すれば、その歩様が重くなるしくなつて亂れがちとなる。だから長時間の運動又は體力の衰へてゐるときには注意しなければならぬ。このことは成犬の場合にも當嵌るものである。元來長距離を自轉車に依つて運動せしむる場合、終始同一速度をとらしむる如きは、臨時鍛鍊法ときは別として、常時鍛鍊には好ましからざることであるが、側對歩豫防上からいつても注意を要することである。

犬の歩様が一步一步状態を異にしなければならぬやうな小起伏地に於ける運動時にも、犬の歩様を亂し易きものであるから、これ亦注意を要するであらう。

これを要するに、その原因が何であらうと側對歩なるものは一の習慣に依つてでき上るものである以上、犬の歩様を亂り易き悪狀況は連續又は度々繰り返さないやうに注意すべきである。尙積極的豫防法としては、屢々各種の地形に於て自由行動を仕向け、運動器の機能の圓滿なる發達を促し、平素の偏頗なる機能又は悪習慣の傾をも矯正せしむることがむしる肝要である。

叙上を要約すれば、側對歩なるものは立派な馬でもこれを仕込めばできるものであるから、立派な犬でも何か不自然のことを續ければ側對歩をとるやうになるかも知れない。この場合、

その爲に犬の能力を左迄害するものとは言はれないであらうが、しかし犬に於ては軍隊乗馬に於けるよりも側對歩を豫防することが容易であるのだから、それにも拘らず側對歩をとるものは、體格上何か普通ならざるものがあると睨んで大過はないであらう。そこで、側對歩そのものに對する評價は、その因つて起る根源と實際の歩行能力の強弱を考へこれを判定すべきである。言ひ換へれば側對歩であるからといつて悉く一樣に幽眼視することは誤であるのは勿論、側對歩必ずしも正常歩の下位に就くものではない。要は側對歩そのものを云々するよりも、歩行力の健否如何に判定の基礎を置くべきであつて、このことは正常歩を通じて同様である。

第二篇 蕃殖論

第一章 蕃殖方針の確立と系統の重視

蕃殖の目的とするところは、できるだけ有用なる犬を澤山作出するといふことであるが、これが實施の方針には二通りある。その一は複製であり、その二は創作である。複製といふのは、これまで出來てゐる立派な型に従ひ、その型通りに再び作り出すことを意味し、創作といふのは、これまで出來てゐる型を改良する意味に於て、更に新なる立派な型を作り出すことをいふのである。だから目的は同じであつても、この二つの方針の間にははつきりした差別がある筈だ。然るにこの二つをはつきりと認識することなく、唯良い犬を作るといふ漠たる考への下に蕃殖を行つてゐるものがありはせぬか。

抑もそれぞれの犬種には一定の標準があるが、今試に何人かの専門家をして、その標準書に基いて犬の姿を描かしてみるならば、多分人々によつていろいろ異つた型のものが描き出さるゝで

あらう。而もそれが名作であるからには標準書と異つてゐるわけではない。蕃殖も亦これと同じことで、同一標準に基いて標準通りに作られたものとしても、その型にはいろいろと異つたものができる。しかし代表的の傑作はさうさらにできるものではない。代表的のものができたならば何々型とか何々系とか呼ばれ、第一の典型として推稱せらるゝであらう。この典型が唯一代か二代だけでなく、強き遺傳力に依つて系統的に勢力を占めるやうになれば、これを優勢血統といふのである。

そこで、今一度蕃殖方針に立ち歸つて考へてみたい……これまで出来てゐる典型に倣つて蕃殖を行へば、比較的容易く立派なものを作出する確率が多いわけだ。だから最も多くの人はこの方針に依るべきであらう。しかしながらいくら立派な典型でもくわしく吟味すれば何らかの短所を持つてゐることは免れないであらうし、又一の系統を追ふて再製を続ける間には、いろいろの變異も生ずるであらう。のみならず時代の進歩につれて新しい要求さへも生ずることは少くない。だから全部の蕃殖者が誰も彼も晏如として、この方針の下に同じことを繰り返してゐるわけに行かない。即ち自身自身新なる典型を創作するものが何人かゝなくてはならぬわけだ。これが爲には卓越した腕前と大なる努力とが必要であることは言ふまでもない。これを今一度言ひ換へれば、

最も多くの蕃殖者は自己の最も氣に入つた従來の典型を選んで、これを目標として蕃殖するわけであるが、他の一方に於ては熱心なる研究家たちに依つて、眞摯なる創作が企てられなくてはならぬ。

一般的にいへば、第一の方針は同一系統の蕃殖を意味し、模倣を意味する。そして第二の方針は異系統の蕃殖を意味し、改良を意味する。しかしながら、今一步細密に考へれば、同一系統に依る蕃殖に於ても、勿論細部に於ける改良(修正)を要し、又第二の方針に於ても一旦得たる改良型を保續する爲には固定作業を要する。この固定作業なるものは同一系統の蕃殖に依らなくてはならぬ。言ひかへれば、その手段に於ては兩者似通つたところがあるが、方針に於て差異のあることに徹底しなくてはならぬ。これに就て更に詳述するであらう。

第一方針 修正の手段に就て一々言ふわけにゆかないが、(一)できることならば、同系統内に於てその缺點を持たぬものを嚴選交配する。(二)もし同系統内に確實なものが得られない場合には、成るべく類似の他系統内に就て探求交配し、その次には再び元の同系統内のものと何代か交配し、更に必要に応じて前と同一の異系統の血を交へるといふ工合にすれば、折角確立せられた型を崩すことなく、優秀系統を永續せしむることができるであらう。

第二方針　これは全然相異つた二つの系統を用ゐて、一の新たな型を創るものであるが、そのいづれの系統に重きを置くべきかは、そのときの計畫に依つて異なるものである。即ち新に生れた系統を臺として、それに原系統中の重きを置く方を何回か入れなくてはならぬ場合もあれば、新に出来た系統同志を用ゐて固定を圖る場合もある。いづれにしても第二回以後は、原系統の兩方を彼は併用すべきものでない。そしてできることならば成るべく早く原系統のどちらからも離れることが望ましい。もしこれから離れることができなければ、創作の意味をなさないばかりかいつまでも右に傾き左に曲り系統の確立はできないこととなる。言ひ換へれば、この方針の蕃殖といへども、唯最初の何回かを除いては、爾後は全然同一系統の蕃殖といふことに歸著するわけである。

つまり、第一方針に於ても修正の爲他系統の血液を注入することはあるが、注入後はやはり原系統を主流として、その型を追ふて進むものであるに反して、第二方針に於ては兩系統から生じた新型のものを選択してこれを追ふて進むものである。而もこのいづれに於ても無闇に異系統の血を入れることは失敗を意味する。これが私の主張せんとする要點である。蓋しいづれの場合に於ても蕃殖の成功といふことは系統の固定を意味し、固定の爲には成るべく同系統の

交配に依らなくてはならぬからだ。殊に創作的改良蕃殖の爲には近親蕃殖さへも用ゐなくてはならぬ。だから次章に於てこれを詳論したい。

第二章 同系統蕃殖

第一節 血縁の遠近と應用順位

同系統蕃殖とは種牡種牝兩方の祖先中に、何頭かの共通した同一犬を有つもの同志を交配する方法をいふのであるが、蕃殖に關する常識上、六代祖以上の祖先犬の共通の如きは、あまり影響がないから一般に先づ五代迄に就て言ふのである。言ひ換へれば、牡牝兩種犬の血統に於て五代祖以内に共通の犬を有つか有たないかによつて、これを同系統蕃殖と考へ、或は異系統蕃殖と考へるのである。

この同系統蕃殖のことを唯近親蕃殖と呼ぶることもあるが、蕃殖の利害關係を審かに研究するに方つては、唯一口に同系統蕃殖とか近親蕃殖とか言つたのでは物足りない。何となれば同じ犬でも一代目にあるのと五代目にあるのとは、遺傳の力に於て雲泥の相異があるからだ。

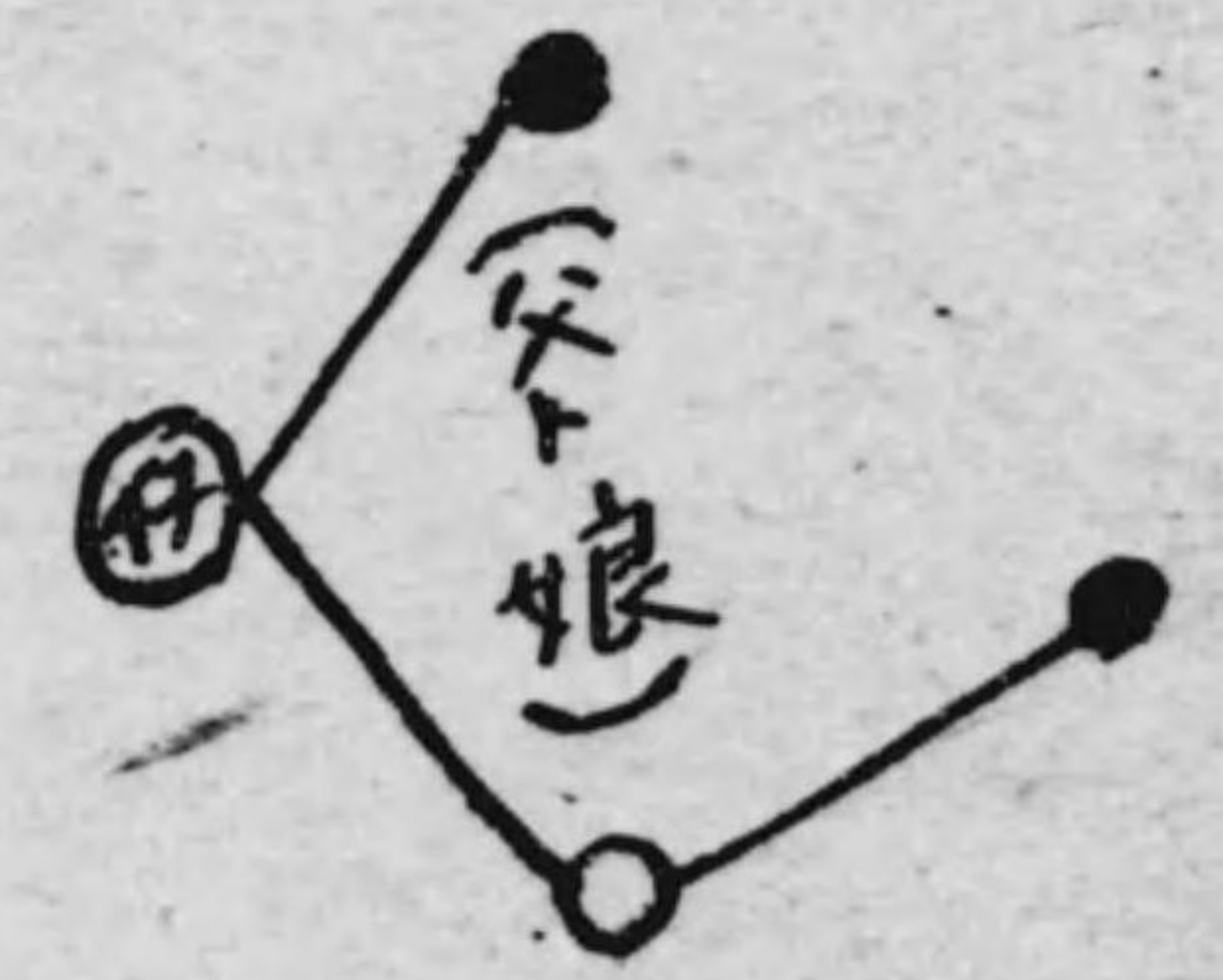
だからもつと小さく区分しなくてはならぬ。ここでは研究上上向三代迄に血縁関係のあるものを近親蕃殖と呼び、それ以上血縁の遠きものを系統蕃殖と呼ぶこととする。

一、系統蕃殖 即ち生れる仔の父母兩血統の四代祖乃至五代祖に同一犬を有つ蕃殖は、前章で述べた複製方針の爲には少くもこれを用ゐなくてはならぬ最もありふれた方法である。この蕃殖は血縁が遠いだけ、これに伴ふ危険性は少いものであるが、それとても、牡牝兩方の血統内にある同一の祖先犬なるものは、何らかの目標的意義を有つものでなくてはならぬ。何ら意義を有たないやうな犬の血液を重複せしむることは、複製方針に反するばかりか何らかの害あることを免かれないであらう。要はその共通犬なるものは蕃殖者の狙ふ典型であるか、少くとも立派な犬でなくてはならぬ。

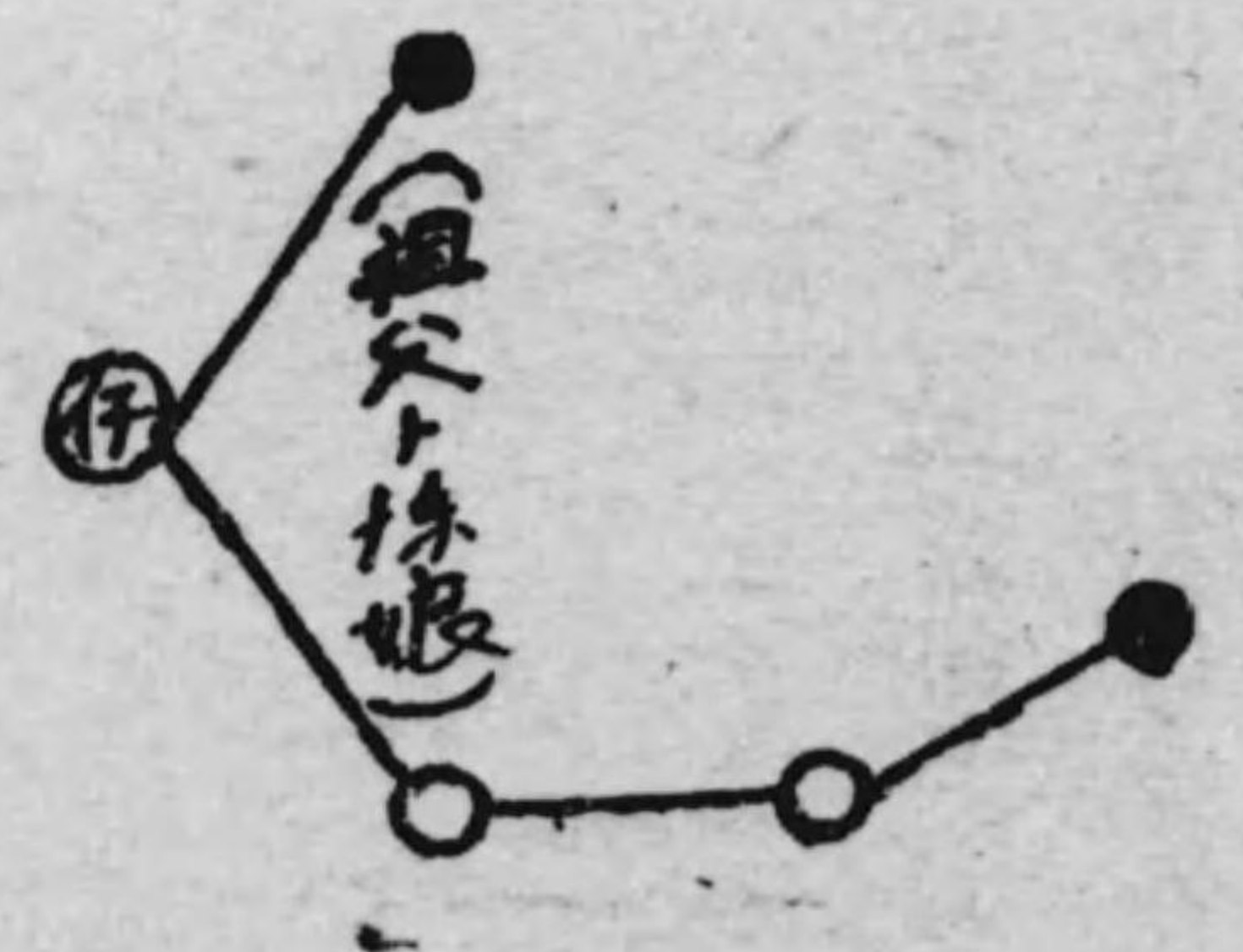
二、近親蕃殖 近親蕃殖に八種あるが、その血縁関係を圖示すれば左の通りである。

以上の通り八種あるが、その中で(3)と(5)と(7)とは圖で見らるゝ通り、父母兩血統内に二種(牡牝)の共通犬がある。言ひ換へれば、同一世代に於ける或る牡牝二頭に就ての近親蕃殖といふことになる。抑も近親蕃殖なるものは或る必要よりして或る特定犬の血液を重複、その優秀性を強調複製せんとするのが目的であるから、これが爲に不要な他の犬までも近親蕃殖せらるゝといふ

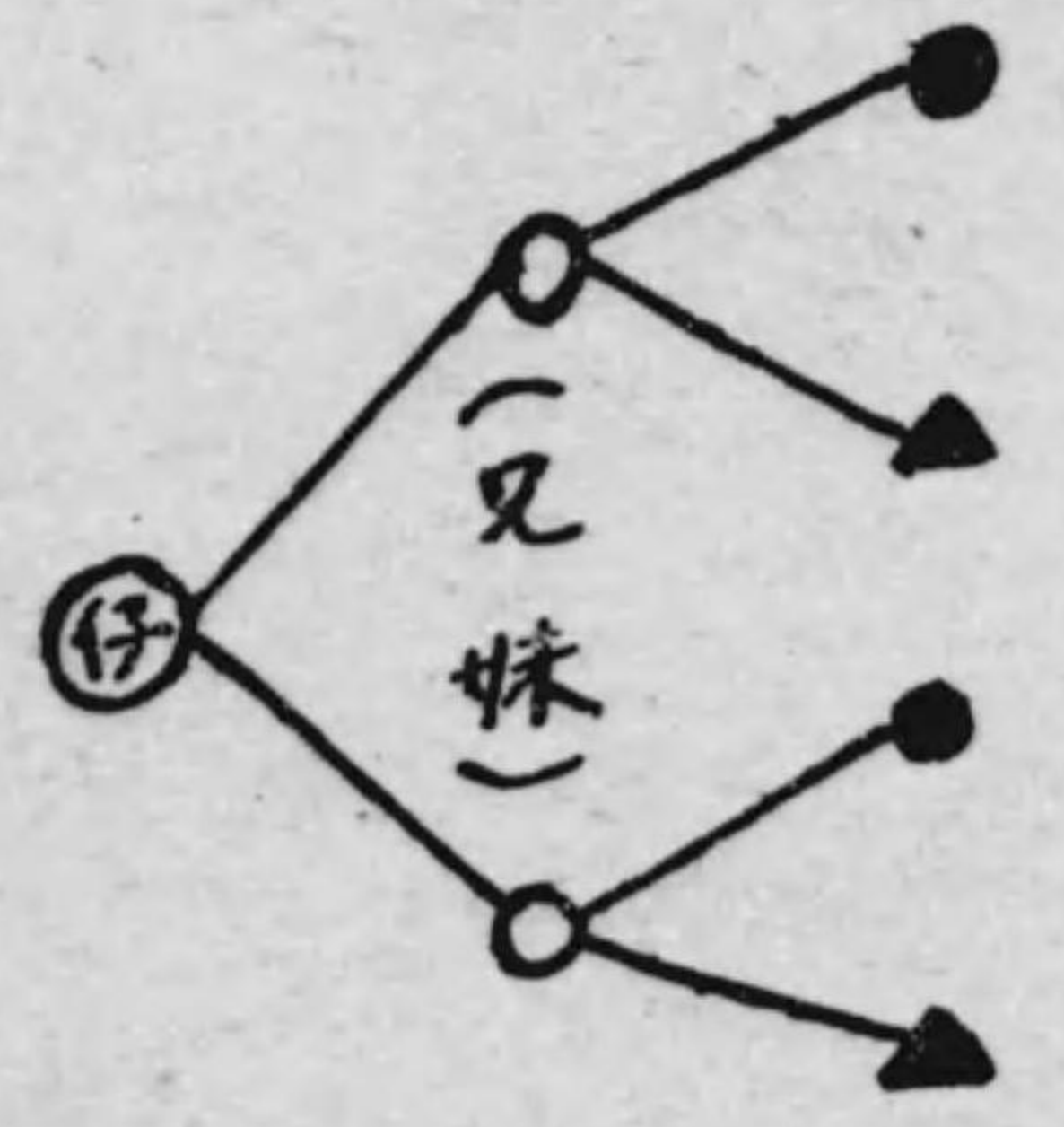
(1) 親子間ノ仔
一代祖ト二代祖=同一犬(一)



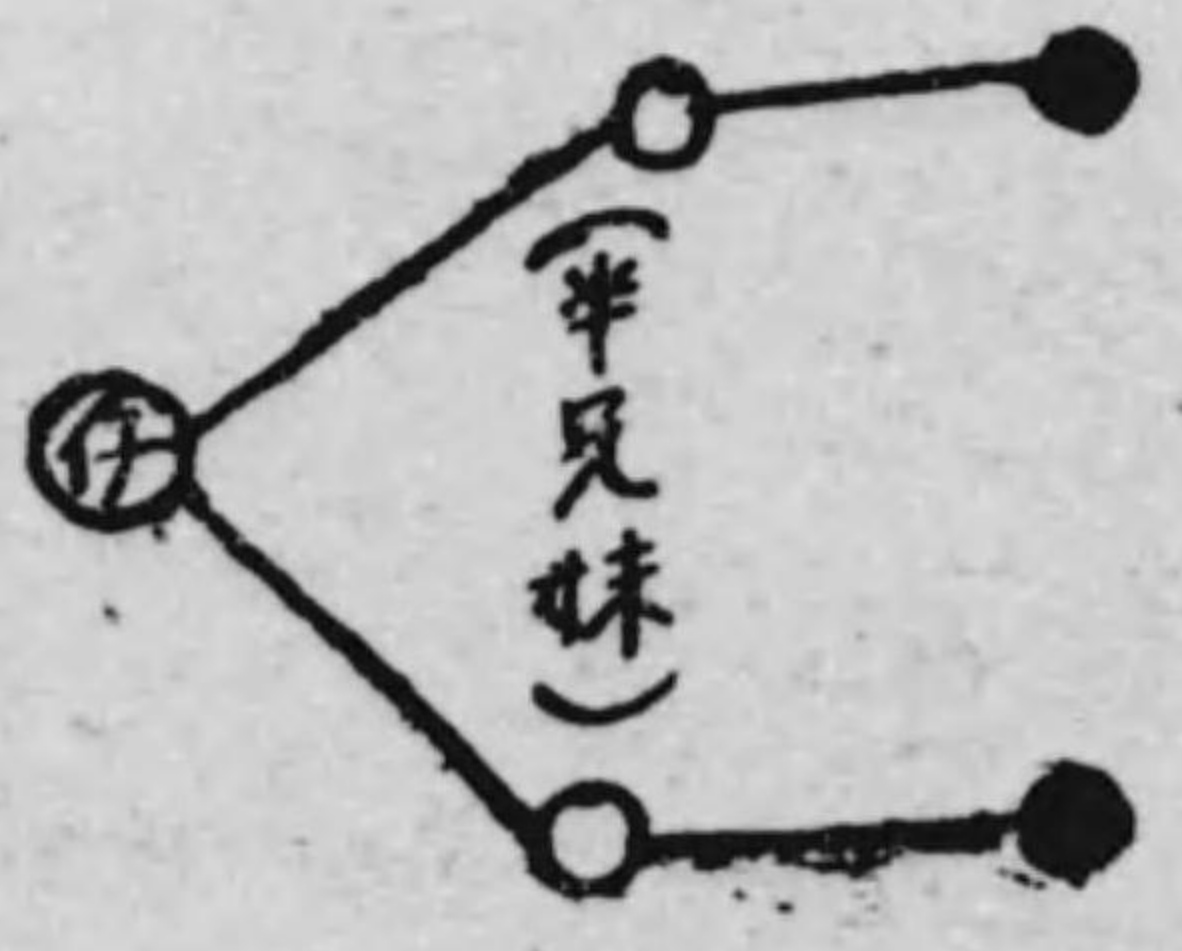
(2) 祖父母ト孫間ノ仔
一代祖ト三代祖=同一犬(一)



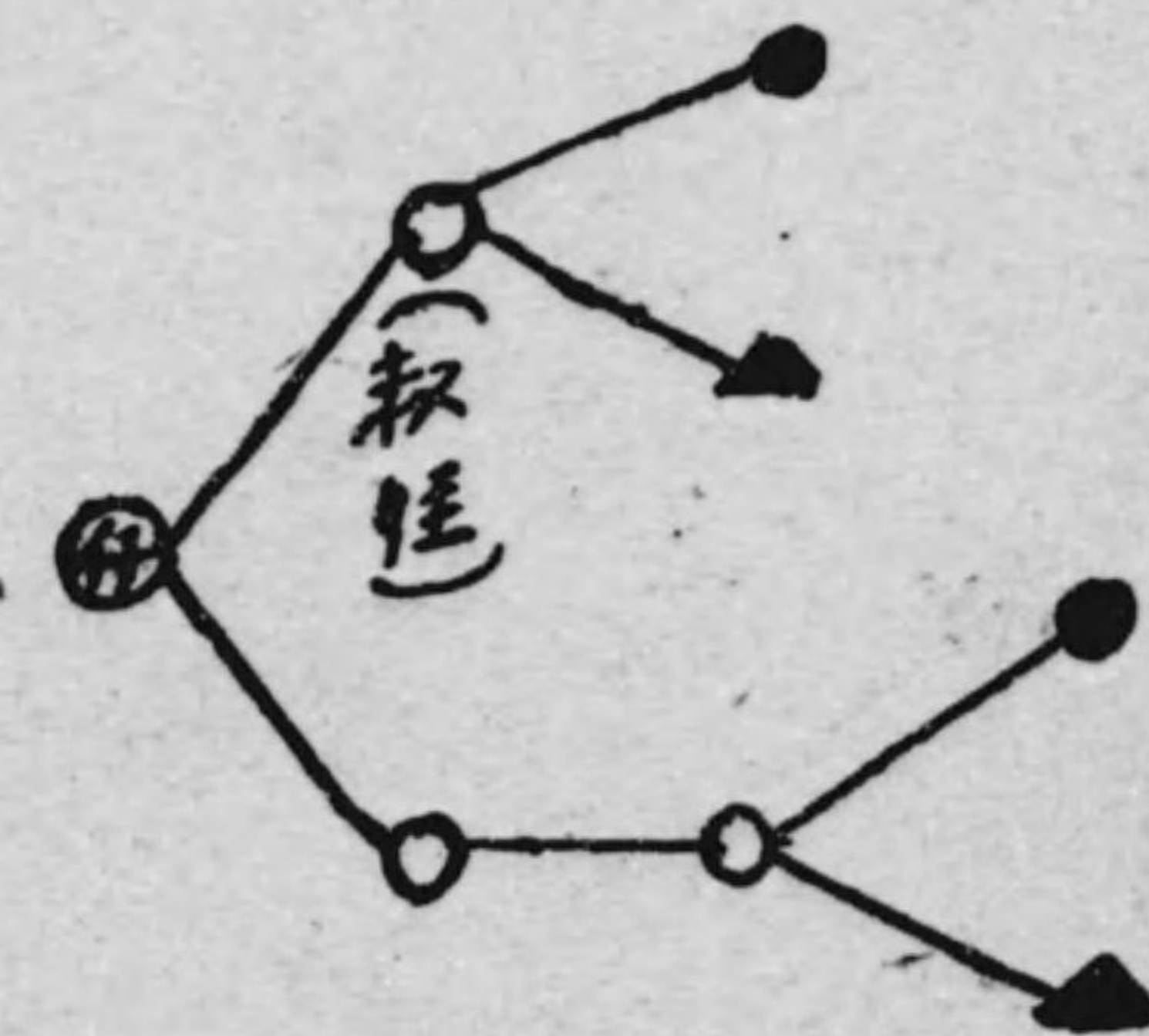
(3) 全兄弟姉妹間ノ仔
兩方ノ二代祖=同一犬(二)



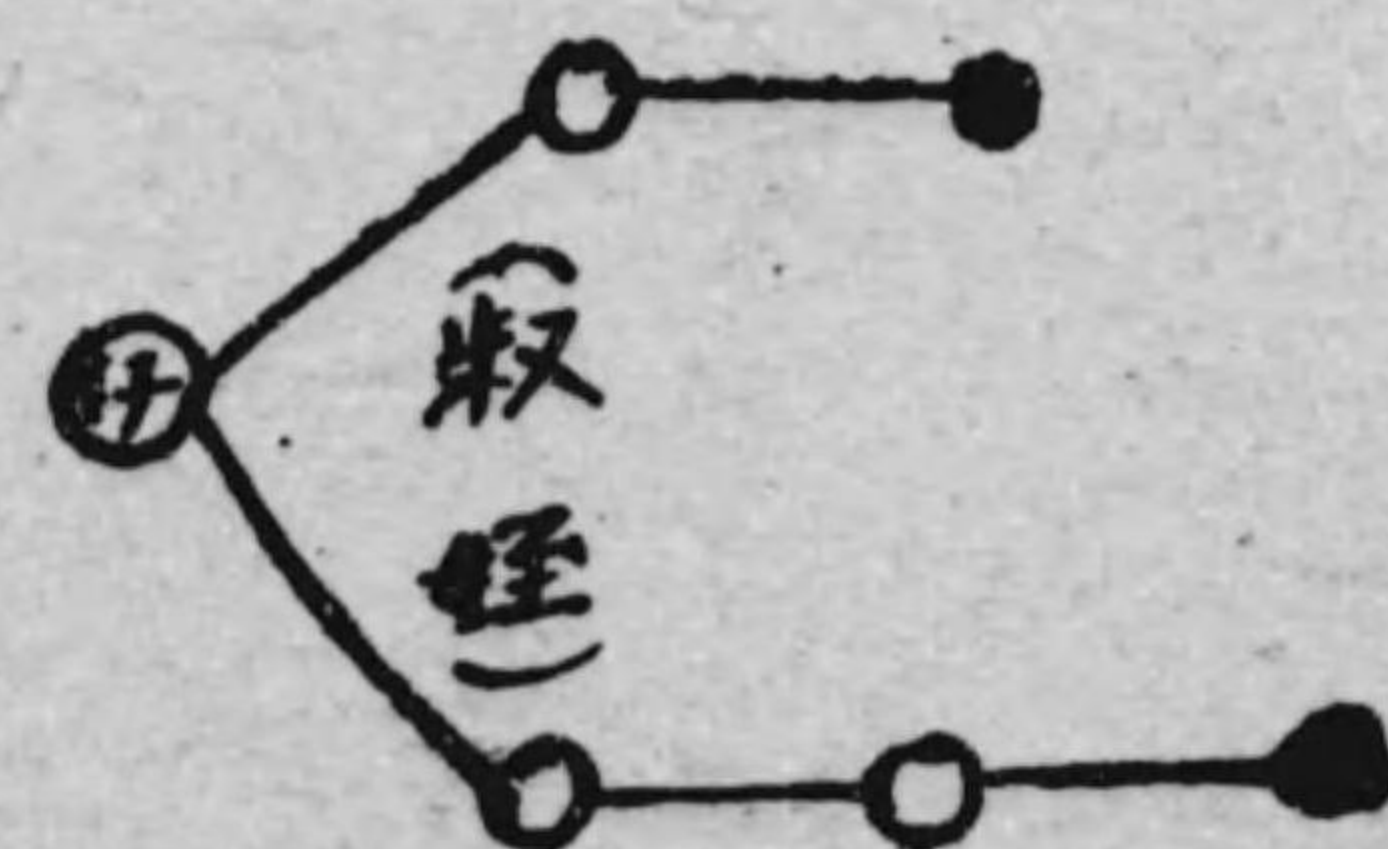
(4) 半兄弟姉妹間ノ仔
兩方ノ二代祖=同一犬(一)



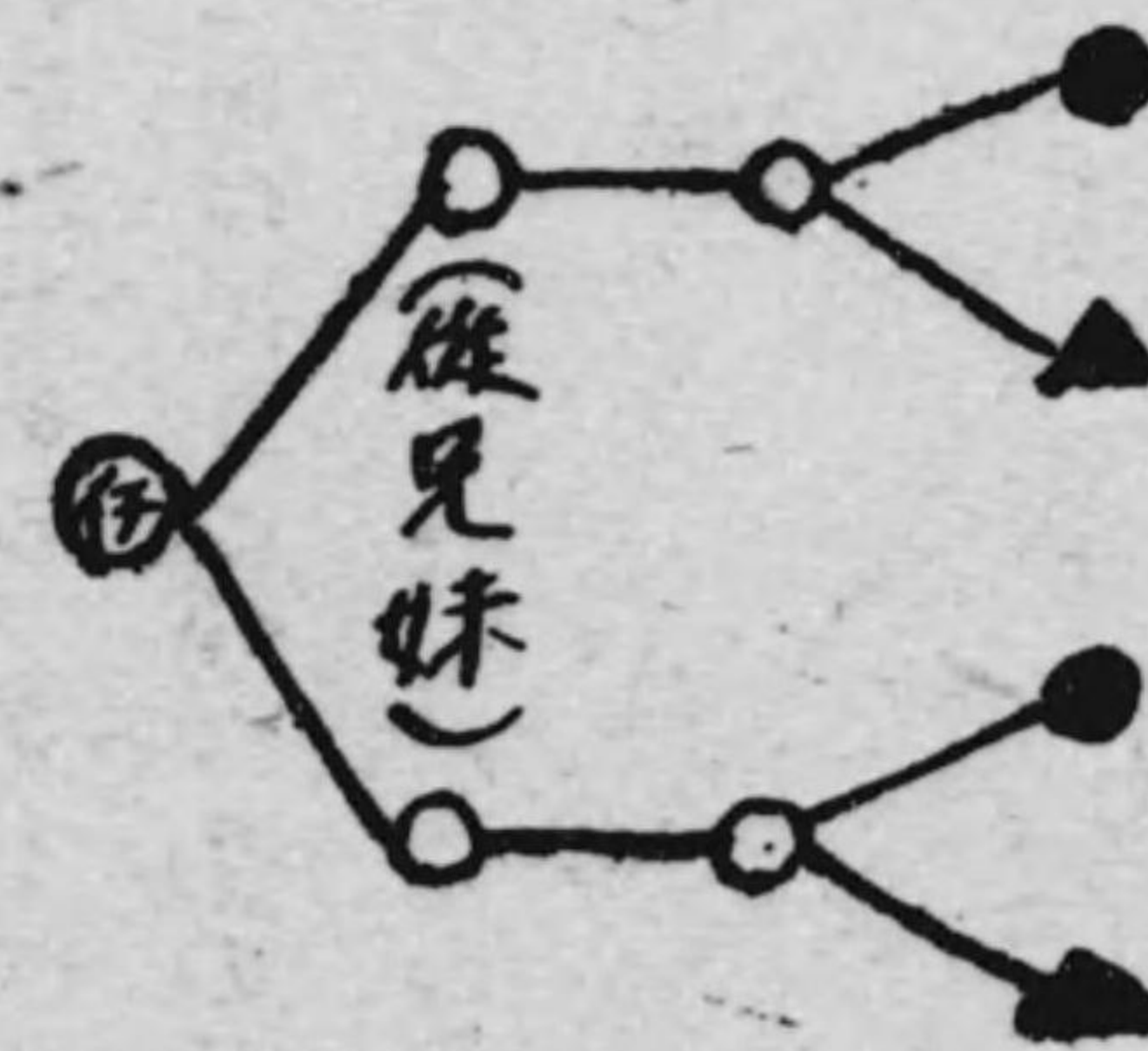
(5) 伯叔父母ト甥姪間ノ仔(一)
二代祖ト三代祖=同一犬(二)



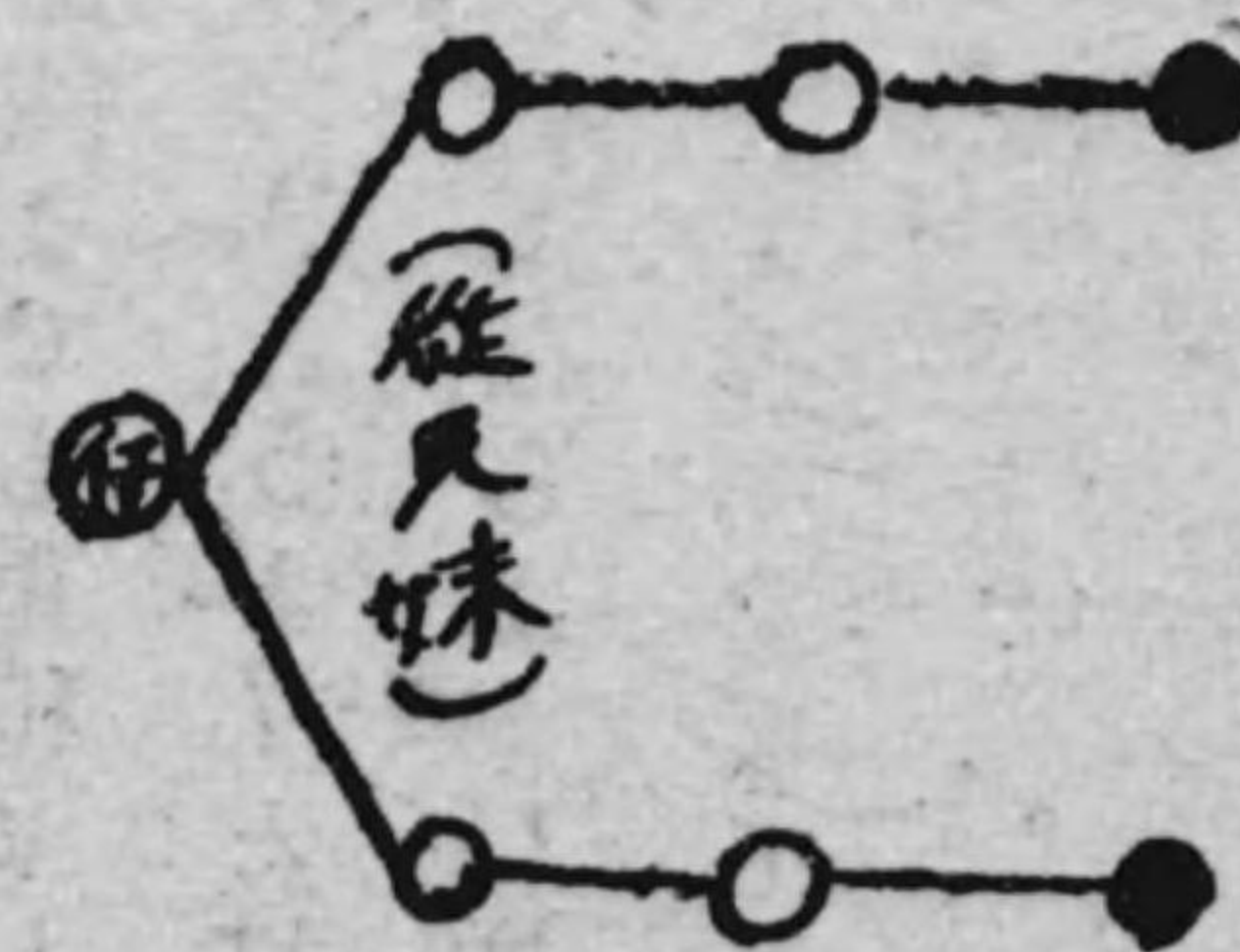
(6) 伯叔父母ト甥姪間ノ仔(二)
二代祖ト三代祖=同一犬(一)



(7) 從兄弟姉妹間ノ仔(一)
兩方ノ三代祖=同一犬(二)



(8) 從兄弟姉妹間ノ仔(二)
兩方ノ三代祖=同一犬(一)



ことは極めて好ましくないことである。そしてかくの如き不必要な他犬の血液までも重積せしめなくとも、(3)の代りに(4)、(5)の代りに(6)、(7)の代りに(8)があるのであるから、(3)と(5)と7とは絶對といつてよい程應用すべきものでない。もし(3)や(5)や(7)の如き近親蕃殖を行ふならば、目標とせざる方の犬の血液の重積から、避くべからざる餘計な害を受くべきことは敢て説明を要しないであらう。

結局、我々の採り得る近親蕃殖なるものは(1)と(2)と(4)と(6)と(8)との五通りといふことになる。近親蕃殖に關する利害に就ては次節に於て詳しく論ずることとするが、私の信ずるところを一言にして盡せば、近親蕃殖そのものに天刑的遁るべからざる責罰が潜んでゐるものとは絶對に思はない。しかしながらこれを行ふに方つては、この五種の血縁の相異に依つて難易があり、又その效果に於ても差異があることは言ふまでもない。で、こゝではこの五種の中いづれが實施し易く、いづれが效果的であるかを研究して、これが應用に就ての一般的順位を判断すれば次表の通りである。

次の表に於て特に注目を要することは、兄弟姉妹がけよりも親子がけや祖父母孫がけを先きに推した點である。これは或は普通の考へとは逆であるかも知れないが、過去の有名なる近親蕃殖

各種近親蕃殖應用順位判定表

種別	配 偶	應 用 順 位	摘 要		
			近親世代	目標犬血液量	親 等
普通	從兄弟—姉妹	I	3—3	・〇一六	五
	伯叔父母—甥姪	II	(2—2) (3—2)3	・〇五一	四
特別	祖父母—孫	III	(1—1)3 (3—1)	・三二〇	二
	親—子	IV	(2—1)2 (2—1)	・三六二	一
	兄弟—姉妹	V	2—2	・〇九九	三
備考	一、血液量はガルトン—ピアースン測定法に依る				
					五
					三
					二
					四
					三
					一
					五

の實績に鑑みても、又次の理由からしても私はかく信ずるものである。その主なる理由は、親子がけや祖父母孫がけは目標犬が上向第一世代にあるので遺傳の確實性が多く、且つ淘汰上の判断

が容易であるからだ。抑も遺傳型質の分離現象は、兄弟姉妹がけに於て最も顯著に現はれるといふ見地からすれば、兄弟姉妹がけに於て良方向への分離を捉へることが効果的であるかの如く考へられないこともないが、實際に於ては配偶に用ゐる兄弟と姉妹との體形は唯一二點に於ける相異だけでなく、もつと多くの點に於て相異があり、而もその中の或る點は優性遺傳型であり、他の點は劣性遺傳型を有つ等複雑であるから、これが捕捉は却々困難である。

これを要するに、兄弟姉妹がけは、最も効果の確實なる親子がけよりも却つて實施が困難であるから、これが應用は大に考へるものであるといふのだ。だから特別重要な意義を有つ目標犬が現はれ、その血液を急速に固定しなければならぬやうな特別な事情がある場合には、むしろ思ひ切つて祖父母孫がけとか、親子がけとかを用ゐることを奨めたい。

從兄弟姉妹がけや伯叔父母甥姪間の交配は、その効果は顯著でない代りに、萬一の過誤から生ずる危険性も少いのであるから、典型的優秀犬(目標犬)の血液を安固に凝集し得るに足る相當の配偶犬がある場合には、これを應用することは決して少くない。

以上は近親蕃殖に關する應用順位に就ての所見であるが、詳細に就ては、尙次節を参照された

第二節 近親蕃殖の利害

抑も近親蕃殖なるものは、或る一定犬の血液を重積するものであるから、その一定犬が良いか悪いかに依つて、その結果に至大なる影響があることは言ふを俟たない。唯問題となるのは、たとへ典型的の目標犬に向つて相當なる後裔同志を交配しても、近親蕃殖の附き物として何か別の害が生ずるかどうかといふことである。この問題に就て往々にして世俗的の迷信があるやうだ。即ち近親蕃殖そのものには避くべからざる天刑があるといふことが、可なり根強く信じられてゐるやうだ。先づこれに就て検討を試み、そして近親蕃殖なるものは時と場合に依つては必要缺くべからざるものであることを論述してみたい。

これに就ての決論を先づ掲げて置く：近親蕃殖なるものは善い方面の遺傳を強調すると共に悪い方面の遺傳も亦同様に強調するものである。而も近親蕃殖それ自身には別に害はない。だから近親蕃殖を行ふからには、絶對條件として目標犬が有つ缺點を強調しないやうに交配を選択しなくてはならぬ。そして生れた仔に就てもこの著眼の下に淘汰を行はなくてはならぬ。それさへできれば近親蕃殖敢て鬼門ではないのだ。

一、近親蕃殖そのものには別に害はない—試に我々の手近に榮えてゐる野生の禽獸に就て觀るに、可なり濃厚なる近親蕃殖が行はれてゐる。森の中に棲んでゐる大きい群棲獸—例へば鹿の如き—もそれ／＼の群で近親蕃殖を繰り返して、生存を續けてゐるものであることを多くの動物學者たちは認めてゐるではないか。それに依れば、一群の長は一群の父であり、又、一群の夫である。即ち最も強き雄の仔はやがてその父に代つて一群の長となり、それはその母や娘や姉妹たちと結びついて蕃殖の役目を果たすものである。蓋し野生の群棲獸なるものは、牝獸は自己と同一血族の牝—即ち自群の牝—を除いては、他群の牝獸を自己の群に近づくるものでない。そして優勝劣敗の天理に従つて、一群の中の一番優れた牡がその一群の長となり、凡ての牝獸を獨占してしまふものである。かくして弱き劣等の個體は終にその子孫を遺すの機會に恵まらるゝことなく、そのまゝ亡び行くものであることも自然の眞理として信じられてゐる。その結果、一地方の群棲獸は他地方のものとは自ら異つた型體さへも持つてゐる。換言すれば、一地方の獸類の型體が獨特であるといふことは、近親蕃殖が繰り返されてゐる證據とも言ふことができる。

この事實より考察すれば、近親蕃殖を行つたからといつて、必ずしも生存永續を脅すものでないことが解かる。否、これに依つて天の意に叶ふところの優れたもの—強きもの—の血統が

益と強化され、その種族の繁榮が持續されるものであることが頷かれるであらう。言ひ換へれば、天理に従ふ合理的の近親蕃殖なるものは、少くもその子孫に對して心身の脆弱を來したり生殖力の減退を招來するものでないことが解かる。

或る人は山間に殘された日本犬の現状に就て曰ふ：「某々山間の犬は狭小なる地域内に於て近親蕃殖を繰り返して來た關係上、今日殘つてゐるものは、凡そ劣等犬であると。さも近親蕃殖そのものを呪ふやうであるが、これに就ては大に考へなくてはならぬ。何となれば、それは野生の群棲獸の場合とは全然蕃殖の状態を異にしてゐるからだ。即ち山間の家犬に於ては、それが家畜である以上、如何なる劣等犬も保護せらるゝこともあらうし、又犬の行動範圍も極めて局限せられ交配の自由を得ないであらうし、殊に畜生の干涉がこれに加はるに於ては野生の群棲獸とは全然異つた蕃殖経路を續けて來たものであることは推知するに難くない。同じく近親蕃殖といつても前者と後者とは全然その立場が違ふ。」

昔からこの國でも、近親蕃殖なるものは無碍に嫌はれて來たが、その一つの原因はこの日本犬に於けるが如き悲惨な現象を見てのことであらうが、人類に於ける近親結婚なるものがより大なる影響を與へてゐるやうだ。

抑も人類に於ける近親結婚なるものは、人倫や宗教等の關係から禁厭さるゝものである。のみならず、これまで行はれた近親結婚なるものは、全然優生學的の選擇からではなく、他の事情から結びついたものであるから、それが子孫に及ぼした影響が何であつたかなどは、今更議論するに値なきものと言はねばならぬ。この價値なき論據に依つて、交配の選擇が自由に行はるゝ家畜の近親蕃殖を云々する如きは愚の至りと言ふべきである。然るに近親蕃殖の反對論者は、近親蕃殖には左の三大害毒が付き物であると説いてゐる：

(一) サイズを小さくする

(二) 體力と精根とを弱くする

(三) 生殖力を減退する

……といふのである。これは科學的に研究せられた結論ではなく、從來の近親蕃殖の結果だけ見てもの觀念である。勿論出鱈目の近親蕃殖や注意の行き届かない近親蕃殖にはかういつた缺陷が現はれるであらうことは喋々を要しない。しかし合理的の近親蕃殖に於てもこの害毒は免かれ得ないものであるかどうかを各項に就て次に検討してみたい。

サイズが小さくなるのが悪ければ、サイズのしつかりした牡牝を選べば可い。體力や精根

の強健なものを望むならば、心身の健全なものを配合すれば可い。生殖力の旺盛なものが欲しければ、多産系のものを選ぶべきである。否、これはいづれの場合に於ても蕃殖者たるものゝ常に心掛けて置かなくてはならぬ條件であるが、近親蕃殖に於ては、一層注意しなければならぬ。注意さへ行届けば近親蕃殖の原理——強化——に基いてこれらの三要件も亦却つて普通の蕃殖よりも一段と強調せらるゝものであることは寸毫の疑がない。一例を挙げれば、今日の進歩したる家禽や家畜の中に、所謂多産系なるものがあるが、その起源は何にあるのか。言ふまでもなく、多産のもの同志を近親蕃殖することに依つて、多産の型質を増強固定したものである。言ひかへれば、近親蕃殖に依ることなくしては、今日のレグホン種の如き多産鶏はでき上らなかつたであらう。要するに、近親蕃殖そのものにかくの如き三大害毒が魔物の如く付き纏ふといふ觀念は、全然非科學的の迷信に過ぎない。

尙充分なる理解を求むる爲に、動物試験や實際の事蹟を挙げてこれを證明したい。

—動物試験に依る結果—

今から何年前には、かのダーヴィンでさへも、植物に就ての近親蕃殖の有利なることを認めながらも、動物の近親蕃殖には右の三大害毒が付き物であるとしてこれを排斥した。今から考へ

れば洵に不思議であるが、その後、いろいろの動物試験が行はれ、ダーヴィン説が誤謬であることが明かにされた。今その一二を紹介しよう：

(一)英國のエドワード博士は、兎や鶏その他いろいろの動物を以て連続的に試験を遂行した。その報告に依れば、近親蕃殖なるものは決して生殖力を減退するものでない。

(二)英國のデヴィスは鼠を以てサイズに關する試験を行つた。この試験に於ては、生れた仔の中で一番大きいものを選んで極近親蕃殖を幾世代も繰り返してみたが、サイズが小さくなるどころか、むしろ反對にだんだん大きくなつたと報告してゐる。

言ふまでもなくこれらの試験は、卓越なる生物學者に依る特別の試験であるから、誤差を生ずる如き凡ゆる條件には嚴密な注意が拂はれた科學的のものである。

—長く近親蕃殖が繰り返された系統—

(一)ダーヴィ伯は闘鶏ゲーム・バンドムを以て斯界を壓倒した。それは約百年間も近親蕃殖を繰り返した系統のものであつた。精確なる報告に依るに：この系統は一度も他系の血液を入れることなく近親蕃殖を繰り返したものである。而も精根や體力に何ら悪影響がなかつたことは、闘鶏の競技に於て常に名聲を博したことで解かる。

(二) 獵犬セツタ種の愛好家たちは、今尙「ラヴェラック・セツタ」なる名を記憶してゐる筈だ。ラヴェラック・セツタといへば、セツタ種の一内種であるかと思はるゝ程、その名は世界に高揚された名系統であるが、これは今から凡そ百年前故エドワード・ラヴェラック氏に依つて洗練固定された一系統であつて、今日のイングリッシュ・セツタなるものは悉くこれから出た末裔といつてよい。ラヴェラック・セツタなるものが如何に勝れた能力を持ち、如何に立派な體形や體力を持つてゐたかはこれに依つて推知できるであらう。そこでこの系統なるものは如何にして創られたのであるか。それは約五十年も引續いて近親蕃殖が繰り返され、固定に固定を重ねられたものである。

(三) カウリイ氏はフォックス・テリアの著名蕃殖者であるが、今から十年ばかり前、同氏の發表に依れば、同氏は常に近親蕃殖に依つて名犬を絶えず作出してゐる。即ち一頭の基礎種牡犬をその娘へ、そして出來た孫(牝)へも、曾孫(牝)へも、玄孫(牝)へもとゞ引つかけ引つかけ十一代も續いて近親蕃殖を繰り返したが、今尙神經過敏でない極めて健全な系統を存續してゐると。同氏はその間に十六頭のチャンピオン犬を出してゐる。これは犬界に於ける屈指の功績であるであらう。

— 高度の體力を要する競走動物 —

近親蕃殖は體力や精根を減退するものであるかどうか。これは最も劇甚なる體力の發揚を必要とする競走動物に就て検討してみればよく解るであらう。不思議にも競走馬や競走犬の蕃殖者たちは、近親蕃殖の禮讚者であるやうだ。

(一) 世界第一の競走馬サラブレッド種は近親蕃殖に依り創り上げられ、種獨特の能力が強化固定されたものに外ならない。これは極めて少數の基礎種馬から出たものである。即ち牡馬三頭、牝馬九頭に依る近親蕃殖の結果であるのだ。今日のサラブレッドは例外なくこの十一頭の子孫であるのみならず、今日でも原産國に於けるこの種の蕃殖者たちは、最も光榮を擔つた優勝馬を基として近親蕃殖を實施してゐることである。彼らはかくすることに依つて再び優勝馬を作り得るものであると信じてゐるのだ。

(二) 競走犬グレーハウンド種の系圖を一瞥すれば、これ亦サラブレッドと同様なことが直に解る。即ち第十八世紀の末葉、グレーハウンドの有名な蕃殖者であり、極めて熱心なる競犬家であつたノーフォーク侯は、本種の能力を強化する爲に改良を企てた。その時の一手段として一度ブルドッグの血を入れ、これをグレーハウンドに依つてかけもどしすること六回にして第七代目に

極めて卓越した典型的の牝犬を得た。これがグレーハウンド史上有名なるザアリナである。實にザアリナは無敵の競走犬であつたので、これを基礎犬として近親蕃殖が始められたのだ。その方はザアリナから生れた優勝犬メチアとスノーポールといふ二頭の牝犬を、それぞれ母犬ザアリナと交配したのである。今日の競走用グレーハウンドなるものは唯一頭の例外なく、この二組の親子がけの近親蕃殖から出たものであり、そしてその間いつも近親蕃殖が行はれてゐる。その最も顯著なものは本種中興の祖と呼ばれてゐるかの有名なるミック・ザ・ミリアといふ牝犬であるが、これが再び基礎種犬となつて多くの極近親蕃殖が行はれた。だから今日の優勝犬はザアリナとメチア、ザアリナとスノーポールとの近親蕃殖の後裔であると共に、ミックの近親蕃殖の子孫でもある。

これに關する詳細はグレーハウンド系圖表を觀れば、競走用グレーハウンドに於ては如何に多くの近密なる近親蕃殖が繰返されたものであるか、又これに依つて如何に多くの優勝犬が獲得されたものであるかの跡が、大なる數賞を以て一目の間に了解されるであらう。

—高度精神力を必要とする作業犬—

以上の諸例は主として體力と體形方面に關する影響を觀たのであるが、そして犬の先進國たる

英國の蕃殖界に就て觀たのであるが、更に精神的智能的方面に就てはどうであるかを、作業犬の先進國たる獨逸の犬界に就て覗いてみよう。

(一)ドーベルマンが如何に近親蕃殖に依つて完成されたものであるかは、フィリップ・グライニヒ氏の著を見ればよく解かるのであるが、こゝにその要を摘むこととする。ドーベルマン種も亦近親蕃殖に依つてその形態を固定したものである。發達の初期に於て近親蕃殖せられたものゝ中で著名なものは、(シュツルムフリード・V・イルム・アテン×グライフ・V・グリーンランド)(ロード・V・ライド×フレヤ・V・チュウリンゲン)であるが、これらはそれぞれ極近親交配のものである。これらはいづれも一九〇六年—七年頃であるが、この現象はこの犬種が年を逐つて固定するに従つて著しくなり、終に兄弟姉妹間の交配に歸著するに到つた。ドーベルマン種が一躍作業犬界に雄飛することになつたのは、近親蕃殖の經路をとつて、その特質が強化されたからである。だから本種に對して有力な、しかも決定的な影響を與へた程の牝は、凡て近親蕃殖されたものばかりであつた。これは牝ばかりでなく牝犬にあつても同様であつて、初期の著名な近親蕃殖種牝は、一九〇〇年の優勝犬であつたフロラ・V・グリーンランドである。これはかの有名なレベロの母犬である。近親蕃殖に依つて生れた牝はいづれも高齡に達しても尙旺盛なる

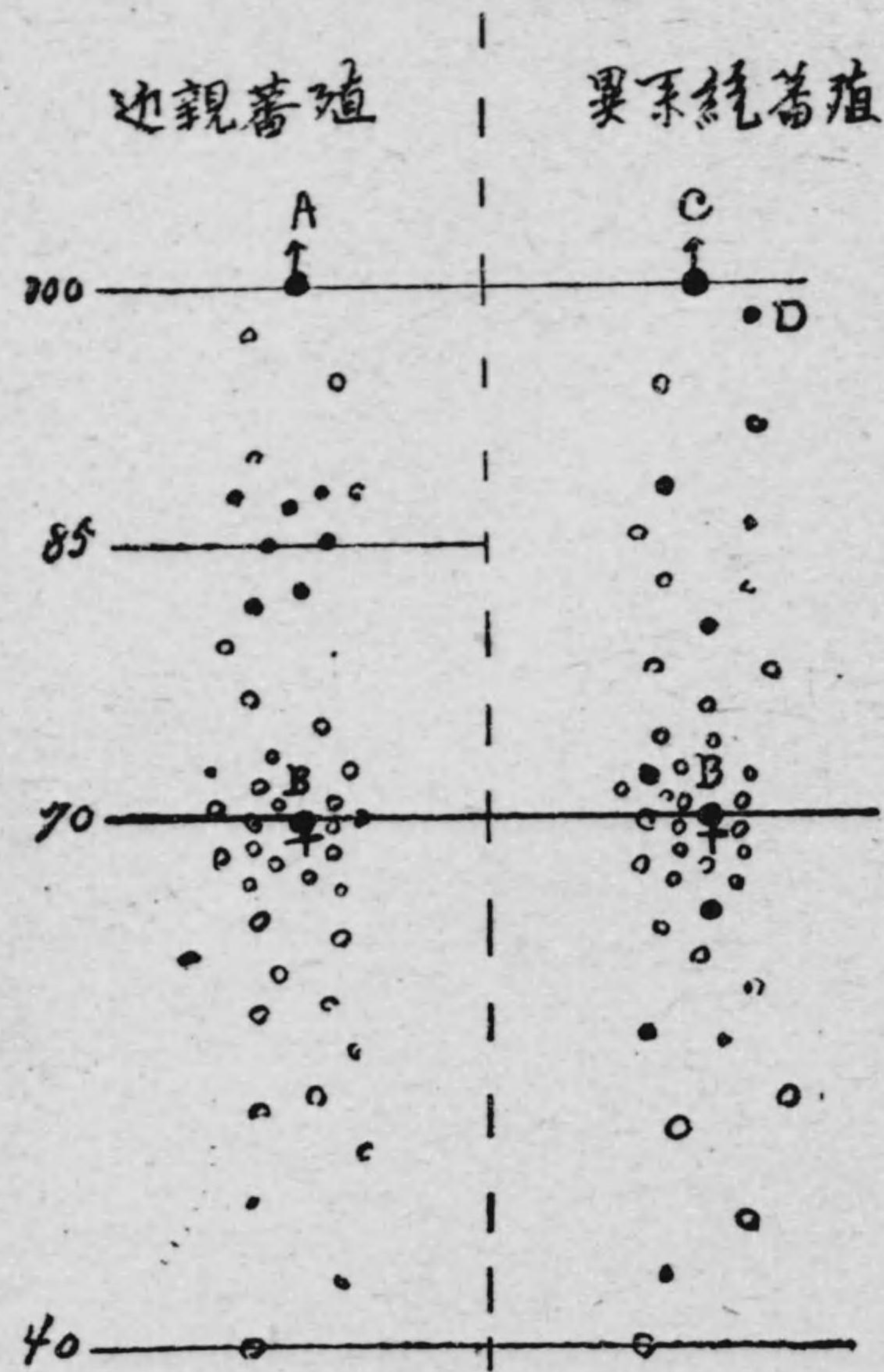
生殖力を持續してゐたと。

これを要するに、同氏は、ドーベルマンが今日の如く洗練固定せられたのは一に近親蕃殖のお蔭であること、又將來本種を完成するの道も亦近親蕃殖に依らなければならぬことを強調してゐる。それと共に近親蕃殖なるものは、生殖力を減退するものではないことをも立證してゐる。

(二)ボクサア種は周知の通り、高度の精神力を持つてゐる使役犬種であるが、これが近親蕃殖に依つて洗練されたものであることに就て、ジョン・ビー・ワグナー氏はその著『ボクサア完成史』に於て詳論してゐる。今その要を摘めば：獨逸は數千頭に上る自國産のボクサアを有しながら、獨逸に於けるボクサア復活の核心となつて、本種の系圖に一新紀元を劃したものが、佛蘭西から輸入された一頭の牝犬であつたことは、洵に奇しき運命の廻り合せといはねばならぬ：との書き出しに依つて、一八八七年輸入せられた一頭の牝犬フロラ號を基礎として、近親蕃殖を繰り返し、現今のボクサア種が完成された道程を説明してゐる。即ちフロラは無名の牝と交配された。それから生れたものの中に、レヒネルのボックスといふ牝があつた。この犬が最初の犬籍簿に登録せられたのである。このボックスはその母フロラに近親交配せられてフロラⅡを生んだ。

このフロラⅡは一八九〇年、その父ボックスに再度近親交配された。その結果、即ち二度親仔がけをした結果、最初の偉大なるボクサアと呼ばれたマイエルのロードといふ牝が生れたのだ。現今のボクサア種は悉くこのロードの血液を潤澤に承けてゐる。ロードの近親蕃殖に依つてかの有名な大メタといふ牝犬がその孫に生れた。

不思議にも、この二頭の牝犬即ちフロラⅠとメタ、そして偉大なる牝フロック・サント・サルヴドル、ウォータンとボスコ・イムメルグリンの三頭。この五頭の犬から今日現存するボクサア團が構成されたのである。即ちこの五頭の直系子孫のみが完全に他系のものを壓倒して、ボクサア界に優位を占め、彼らと同時代に生れた數千のボクサアは、殆んど影を留めない程、残る方もなく亡びてしまつたのである。更に言ひ換へれば、これら五頭の偉大なる祖先犬が、凡ゆる現在の展覽會犬の九十五パーセントを形成してゐるのである。彼らはいづれも卓越した個性を有し、それが直系の子孫に繼承されてゐるのである。外觀以外に優秀な稟性を備へてゐればこそ、世界の一角に偏在してゐた一群の犬が、無名に等しかつたその犬種全體の名聲を一躍して飛揚せしめ、而も他の數千の同族を壓して、首位を占めることができたのである。のみならず、その精神的優越性は敏活で、伶俐で、素直で、馴致性に富んでゐることに依つて證明される：と。

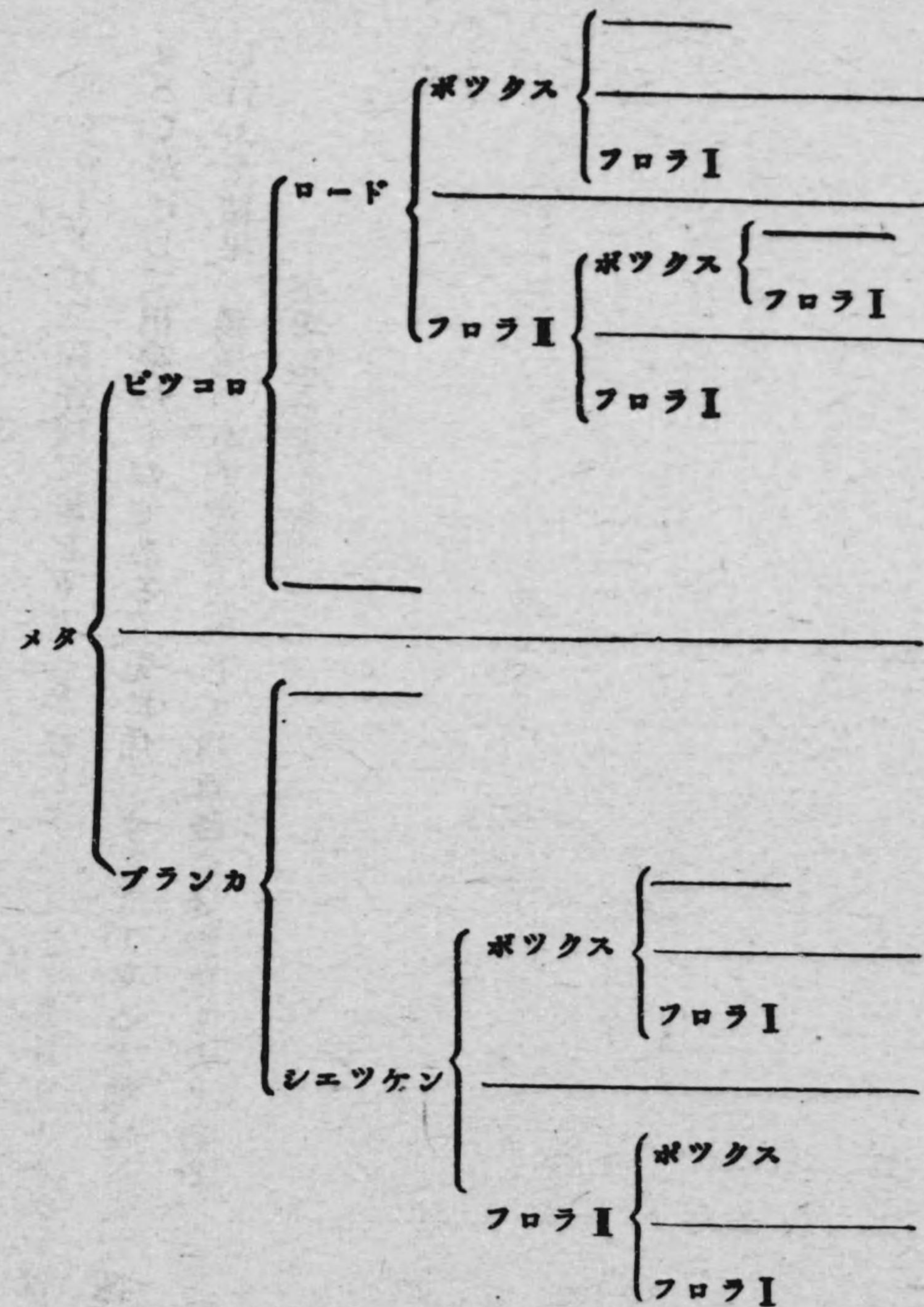


第二〇圖 近親蕃殖と異系統蕃殖との結果
觀念的比較圖

以上述べたところに依つて近親蕃殖が實らす効果に就て、充分證明せらるゝわであるが、更に學理的方面から述べてみよう。
或る系統に屬する全部の犬の出栄えを調べ、これに點數を附けると、四十點乃至百

即ちロードは二回連続父母をもどしがけして、フロラII及シエツケンはいづれも母犬を一回もどしがけして出來たものである。兎に角、ボクサアなる犬種はこんな極端な近親蕃殖を繰返し行ふた結果、獨逸の有能使役犬として槍舞臺に登つたものである。

— 學理から觀た效果 —



近親蕃殖圖表

- (1) メダ=ボツクス(3-3)×フロラI(3-3)
- (2) ロード=ボツクス(1-2)×フロラI(2-2)
- (3) フロラI=フロラI(2-1)
- (4) シエツケン=ボツクス(1-2)×フロラI(2-2)

ボクサアの基礎犬が、如何に極近親交配が繰り返されて出來たものであるかを一覽する爲に大メダの血統を掲げよう。

點の間に全部の犬があるものとすれば、上圖で見らるゝ通り、その平均點は七十點となる。即ち確率算(公算)の公理に依れば、この系統の大多數の犬は凡そ七十點の出來榮えを有ち、この平均點を遠ざければ遠ざかる程上下どちらもだんだん少數となる筈だ。そして最高百點の犬は極めて稀であるであらう。

今この傑出犬Aといふ牡犬を七十點のBといふ牝犬に交配すれば、その結果はどうなるかといふことが問題である。

クエテレットの高低變異説に依れば、その結果はおしなべて、百點と七十點との中間八十五點附近のものとなるといふ。然るにこのBなる牝犬を他系の傑出犬百點のCと交配すれば、或は百點のものも出来るかも知れないが、それは確實でないばかりか他のものは、四、五十點のものもあるといふ工合に分散するであらう。言ひかへれば、豫想がつき難くそして固定的でない。

だから異系統蕃殖に於て幸にして百點にも値する傑出犬Dが生れたならば、Dを固定さす爲には更にCを目標犬として近親蕃殖を行はなくてはならないこととなる。これを要するに、異系統蕃殖なるものは新奇なる改良の第一歩を創り出す必要な方法ではあるが、それは原則として浮草

のやうなものであるから、それを固定さす爲にはやはり近親蕃殖を行はなくてはならぬ。(第一章蕃殖方針：参照)

結 論

以上いろいろの角度から近親蕃殖なるものを検討したつもりであるが、それに依れば、近親蕃殖そのものに何ら害毒があるわけがなく、これに依つて立派な健全な系統が建立せられ、種の進歩に大なる寄與をなすものであることが了解されるであらう。否、近親蕃殖でなくては、到底固定的美果を擧げ得るものでないことも了解される筈だ。けれどもこれは常道の蕃殖法ではない。即ち或る特殊の目標犬があつて、油斷をすればその大切な遺傳型質を取りにがしてしまふといふが如き場合にのみ用ゐらるべきものである。何となればこれが實施には配合の選擇が嚴密でなくては弊害が起るからだ。そして嚴密に選擇すれば自然實施し得る機會に恵まれることは極めて少くなるからだ。

さりながら、異系統の蕃殖なるものも亦常道の蕃殖法ではない。何となれば折角の固定を破壊するものであるからだ。だからこれに依つて新奇なる系統を創り出さんとする場合か、又は同系統蕃殖に於ける油斷から來る缺陷を救濟せんが爲時々これを交へるものであつて、いづれ

にしてもこれに次いで再び近親蕃殖乃至は系統蕃殖を行つて固定を確めなくてはならぬ。されば常道蕃殖とは何を指すものであるか。言ふまでもなく、所謂系統蕃殖—目標犬を定めたる三代乃至四、五代の血縁に依る蕃殖である。

第三節 近親蕃殖實施要領

前節で述べた通り、近親蕃殖そのものには別に害があるわけではないが、これが實施を過ればその被害は慘烈であるのだから、これを行ふに方つては萬全の注意を拂はなくてはならぬ。近親蕃殖が成功するかどうかは、實にこれに關する諸判斷の適否と注意の深淺如何に存するわけだ。私はこれに關する要領として左の四項目を擧げるであらう。

(一) 目標犬の價値判斷

(二) 取組む血縁の近親限度判斷

(三) 種犬の嚴選

(四) 産出仔淘汰の適正

右の四項目に就て以下所見を論述しよう。

(一) 目標犬の價値判斷

或る程度の危険を冒して近親蕃殖を行はんとするからには、その目標犬なるものは果して近親蕃殖迄實施して、その血液を重積しなければならぬものであるかどうかを第一に判斷しなければならぬ。その價値判斷は唯その目標犬が卓越であるかどうかといふことだけではなく、たとへそれが卓越であるにしても、既に他方に於てその目標犬の型質が相當子孫に傳へられてゐるかどうかといふことも考へなくてはならぬ。既にどこかで相當の成績が擧げられてゐる場合には、所謂系統蕃殖に依つてその目的を達し得るのであるから、一般としては何も危険の淵に臨む必要がない。

(二) 取組む血縁の近親限度判斷

どうしても近親蕃殖を行はなくてはならぬものと定つたならば、次に考へなくてはならぬことは、如何なる程度の近親配合に依つてその目的を達し得るかの判斷をしなければならぬ。蓋し必要の限度を越えた近親を以て蕃殖することは、是亦無謀と言はなくてはならぬからだ。

これが爲には本章第一節に掲げた各種近親蕃殖應用順位を参照して判斷すべきである。

これに就て今一度繰り返して置く…出來ることならば、普通近親蕃殖法「3—3又は2—3」に

依りたい。しかしそれでは目的を達し難いと判断すれば、特別近親繁殖法(1-3又は1-2)に依るべきである。そして兄弟姉妹がけは他の方法では種犬そのものゝ選擇ができない等、萬々止むを得ざる場合にのみこれを應用することを注意したい。親子がけ又は曾祖父母孫がけは、前節に於て舉例したカウリー氏のフォックス・テリアの優秀作出や、ザアリナ號を基礎とするグレーハウンド種の改良や、フロラ號を基礎とする獨逸ボクサー種の進歩固定に於て見らるゝ通り、案外危険率が少くしてその効果は驚異的のものであることを強記すべきである。

(三) 種犬の嚴選

以上に依つて、近親繁殖を行ふべきや、如何なる限度の血縁を以て實施すべきかの決心はついたが、彌々の實施となればこれに適應する種牝犬があるかないかが一大問題である。いくら決心が良くても、好適なる種犬の配偶が得られなくては、この近親繁殖は思ひ切つて止めなくてはならぬ。そして他の血縁を以てする方法に依らなくてはならぬ。抑も近親繁殖が成功するか否かは一にかゝつて適應種牝犬の選擇如何に存するといつてよい。近親繁殖には淘汰が最も大切であるといふ言はれてゐるが、淘汰が如何に大切であらうとそれはむしろ消極的の第二義的のものであつて、第一義的のものは實に種犬の選擇にあることを強記しなければならぬ。世に近親繁殖の呪

はるゝ原因を作るのは、確信のない種犬で間に合せのこゝろを行ふからである。種犬の選擇に就ては勿論一般原則を嚴守しなければならぬが、私は特に次の二要項を掲げてこれが嚴守を強調するものである。

一、サイズ、精根、生殖力の三點を第一條件とすること。

このことは考へればよく解ることであるが、實施に方つてはとかく等閑になり易い。その主な原因はあまりにも體形の選擇に目がくらんでしまふからだ。兎に角この三點は近親繁殖に於ける種犬選擇上の第一條件であることを忘れてはならぬ。否、これは根本條件であるから、他の條件がいくら良くてもこの三點に疑のある場合には、その配合は斷然思ひ止まらなくてはならぬ。

二、牝牝兩犬は共通の缺陷を絕對に持つてはならぬ。

このことは一般の繁殖に於ても大切な條件であるが、近親繁殖に於てこの點に少しでも緩慢があれば、この結果は恐るべき缺陷となることを忘れてはならぬ。而も互に近親であるから、とかく共通の缺陷を有ちがちである。これが爲近親繁殖を行ひ得る種犬といふものは容易に得られないものである。

これを要するに、右二要項さへ備つてゐれば、たとへその結果が成功的に擧らないまでも、

犬種の爲に害毒を流す程の不首尾とはならないものであると私は信じて疑はない。

第三章 遺 傳

第一節 メンデル法の應用價值

メンデル法を知らなければ犬の蕃殖はできないかのやうに唱道されてゐるが、果してこの法則が我々の一般蕃殖にどの程度迄應用されるものであらうか。これを確めて置くことは蕃殖の實際に於て肝要なことと思ふ。私の信ずるところに依れば、メンデル法が如何に勝れたものであるにしても、一般の蕃殖には殆んど應用されるものでないといつてよい。一般には「親は親によく似た子を産むものである」といふ極めて平凡な觀念こそむしろ蕃殖實施の爲の核心をなすものであると私は信ずる。言ひ換へれば「仔は親に最もよく似る。そして祖父母にも可なりよく似る」といふことが我々蕃殖者の最も信賴する信條であり、又動かすべからざる法則でもあるのだ。何となれば既に固定せられた立派な種類に於ては、その中から自己の最も氣に入つた典型を見付けてこれを再製すれば蕃殖の目的が達せらるゝからだ。元來メンデル法なるものは遺傳型質の分離に

關する法則であるのだから、兄弟姉妹がけとか、甚しく遺傳の型質を異にする異系統の蕃殖を行ふ場合の外、この法則に依つて處理しなければならぬやうな問題は先づ起らないわけだ。言ひかへればメンデル法をいつも應用しなければならぬやうな蕃殖を行ふといふことは一般の蕃殖にはあり得べきことでなく、もしありとすれば、その蕃殖は多くの場合脱線を意味するものである。これを要するに、我々の蕃殖は立派な親に似た仔を作るといふことであり、これが爲には同系統の蕃殖に依れば、親に似た仔が出来る可能性が最も大なるものであるといふことである。優性遺傳がどうの、劣性遺傳がどうのといふやうなことに立ち到るやうでは、一般の蕃殖としては決して成功的なものといふことはできない。

第二節 ガルトン法は誤謬であるか

メンデル法が発見せられて以來、ガルトン説なるものは甚しく影が薄くなつたやうだ。或人々はガルトン説など全然誤謬であるとさへ言つてゐる。果してさうであらうか。これも確めて置かなくてはならぬ一の問題である。私の信ずるところに依れば、生物發生に關する量を測定するには貴重なる法則であると思ふ。

元來ガルトン法なるものはメンデル法に僅に先つて唱へられた學說であるが、この兩法はそれぞれ異つた立場を持つてゐるものであることを知らねばならぬ。

メンデル法は生殖細胞の構成よりする遺傳型質の分離統合に關する法則であるが、ガルトン法は數理に基く生物發生の測定法である。即ち前者は生物學的遺傳の法則であり、後者は靜學的測定法である。だから或る特定の交配に依り産出する一仔の型質をガルトン法に依つて豫言するのは誤りであるが、多數の頭數に就て考へるときはその測定法は眞である。殊に同一の遺傳單位を有つ同系統蕃殖に於ける發生量の測定にはよく當嵌まるものである。だから、私は本章第二節の近親蕃殖應用順位の判定に於ける血液量の測定に、これを應用して參考としたわけである。

ガルトン法なるものゝ基礎は兩親 $1\frac{1}{2}$ 、祖父 $1\frac{1}{4}$ 、曾祖父 $1\frac{1}{8}$ の責任を持つといふのであるが、同氏の協同研究者カール・ピアソン博士は更に精密なる計算に依つて兩親 $0\cdot62$ 、四四、祖父 $0\cdot1988$ 、曾祖父 $0\cdot0630$ 、玄祖父 $0\cdot0202$ になるといふのである。

ガルトン法が眞であることは試に多くの動物を見渡しても解るではないか。最も多くのものはその兩親に最もよく似て居り、これに次ではその祖父にも或る程度迄似て居る。その他の血縁

のものには、世代が遠くなればなる程似る程度が少くなることは何人も否むものはなからう。これを犬に就て言へば、同じ名犬でもそれが父である場合と、祖父である場合と、曾祖父である場合とでは漸次にその遺傳的效果が少なくなつてくることも知り易きことであり、一般に認めてゐることである。だから血統書にはそれぞれの犬の世代が明示してあり、そしてその記載は或る程度迄の世代(通常四代)に止め、遺傳效果の極めて微々たる五六代以上のものは、實際上必要がないといふことになるのだ。これに依つてもガルトン法が眞でないなどといふことはできないであらう。否、我々の一般蕃殖に於てはメンデル法よりも、むしろガルトン法を常に應用するものであると言ひたい。即ち『仔は最もよく親に似るものであつて、これに亞いでは祖父に似る』といふ觀念はガルトン法に一致するものであつて、ガルトン・ピアソンは卓越した數學者であつたので、これを數値で現はしたまでのことだ。これが眞であるが故に實際我々の行ふ蕃殖の爲の交配の目安がたつのである。そして或る名犬を親として蕃殖することができない場合には、それを目標犬として近親蕃殖や系統蕃殖に依つて、その血液を重積せしめ親代りの效果に近寄らしめんとするのであるといふこともできる。

メンデル法必ずしもガルトン法を裏切るものとは考へられない。メンデル法は、たとへ親か

ら或る一定の分量が傳はりはしても、それが分離するので、一方の遺傳單位は潜在して現はれないといふ觀念である。だからそれとこれとは區別して考へなくてはならぬ。如何なる場合にその區別が必要であるかといへば、牝牝異つた遺傳單位(外貌的には甚しく型の異つたもの)を有つ場合である。かくの如き差異は同系統の牝牝間にもないとは言はれないが、異系統の犬にあつては當然あり得べきことである。だから、こんな場合にはガルトン法は當てにならないものと思はれることもあらう。

第三節 中和遺傳と補償

右に述べた通り、牝牝異つた遺傳單位を有つ場合には、その遺傳は分離して現はれるものであるから、同系統蕃殖に於ては掛け離れた型質を持つ牝牝の交配を避けなくてはならぬ。然らざれば一方の卓越した美點を以て他方の缺點を補償することはできない。このことは今日蕃殖界に於て強く唱導せられてゐるが、私は、これにも例外があることを指摘して、補償に関する一般法則と中和遺傳が補償に及ぼす効果とを區別認識することを強調したい。

中和遺傳とはキアスル博士が多くの動物試験に依つて發見した特別法則であるが、牝牝兩方

の型質が可なり掛け離れてゐても、その遺傳單位が同原組織のものである限り、その型質が互に歩み寄つて中和して現はれる現象を謂ふ。

その一例として既に第七章第六節に於て色素の中和に就て説明したが、中和遺傳の起る最も顯著なるものは體形上の長さに関する遺傳である。即ち一般に長いものと短いものは可なり掛け離れてゐても、分離遺傳をなすことなく中和されるものである。だからサイズの如きも、極端な差異ある巨大漢と一寸法師を除いては、よく中和されてその仔に傳はるものである。

サイズは勿論その他體形各部に於ける長短は、一般法則に従ふことなく過不足互に補償せられ得るものであるといふことは、蕃殖上に至大なる便益を齎らするものであることを強記しなければならぬ。このことは一寸考へれば、一般の場合の補償と同じことであるかに考へられるであらうが、その性質に於て相異がある。

抑も遺傳に於ける補償といふことは、唯過不足互に相補ふといふことに依つて得らるゝわけのものでなく、一方が有つ缺點を他方が有つ典型的―適正―のものに依つて修正するといふことに依つて成功するものである。言ひ換へれば、一般補償の具備條件としては、一方は典型的―適正―のものでなくてはならぬことを必要とする。しかし中和遺傳をなすものにあつては、一方が必

すしも適正のものでなくてはならぬことはない。兩方とも過不足のものでそれが中和されるといふのだ。このことは種犬の配合上補償に關して大切なる見解であるであらう。特にサイズや體各部の長さに關しての補償に於て然りである。

以上の意味をもつと明かにする爲に、シエパードの體高を例にとつて説明するであらう。今假に五十六種といふ小さな牝があるとする。この牝犬の爲に交配の相手を選択するには、一般補償の原則に依れば、中正體高(六二種五)の牝を選ばなくてはならぬわけであるが、中和遺傳の原則に依れば長さは中和遺傳をなすものであるから、それよりもつと大なる牝(結局六五種)を交配しても構はないといふのである。否、それが最も効果的であるといふのだ。兎に角私は交配の選擇に於てこの例外があることを提唱するものである。

第四章 種牝と種牝

第一節 牝牝いづれの遺傳力が強いか

世間動もすれば、牝は牝よりも遺傳の力が強いものであるといふやうな觀念に捉はれ易い。今

から六、七十年前にはオートンやドクトル・オーカーやサー・エヴェット・ミレースさへもさう言つてゐた。しかしそれはどこまで眞であり、どこまで誤であるか。我々はこれを検討しなければならぬ。

成る程、鳩や鶏の如き禽類にあつては、羽毛の色や外飾的部分に於て雄の親に似るものが多い。しかしこれは體の部分部分によつて、雄と雌とは遺傳の受持ちが異つてゐることを示すまでのことである。内容的殊にその體質に於ては、むしろ雌の方に似るものと言はれてゐるではないか。

又多くの家畜群を通觀するに、その群の多くのものは父親に似てゐることも争はれない事實である。しかしこれは一般の蕃殖に於て種牝には優れた遺傳力を持つ良い種畜が用ゐられるからではないからうか。

如何なる場合に於ても、牝牝いづれにかかはらず、二つの動物の遺傳力が全然同等であるかないかをはつきり證明することはできない。何となれば二つの動物は系統的にも、又後天的にもその仕上が異つてゐるからだ。よしや兄弟姉妹の如く系統が全然同じであつても、全然同一の遺傳型質を父母から受けるものではない。それが同等であるのは唯一卵性双生仔の場合だけ

のことだ。これさへも爾後の境遇が異なるから全然同じに出来上るとは言へない。

だから牡の遺傳力が強いか、牝の遺傳力が強いかといふことは或る特定の犬に就ては産れた仔の出来榮えから察してこれを言ひ當ることはできても、一般的にはガルトンの測定法に依つて概括的に牡牝同等であるといふより外いたし方がない。論より證據、蕃殖法の制裁を受けない人類に就てこれを観るに、子は父にもよく似てゐると共に、母にもよく似てゐると言ふより外言ひ方がないではないか。

これを要するに、犬の蕃殖に於ては種牡と種牝との遺傳價値は同等のものであることに信頼して、兩方とも立派なものを選ばなくては、立派な結果を擧げ得る確率が少い。唯種牡は多くの牝に對して種付けすることが出来るものであるから、その選擇に於て自由の餘地が大であるだけのことだ。種牝を以て所謂臺牝であるとか、唯畠を借りるのだとかいふ如き觀念は誤であるから、よろしく蟬脱しなくてはならぬ。一言に盡せば、牡牝兩方とも種であつて、一方が他方の畠となるのではない。

第二節 性徴の重要性

牡にしる、牝にしる遺傳力の強いものと弱いものとある。犬によつては交配の相手方にあまり關係なく、いつも良い仔を産むものがある。これを優越遺傳力を有つ犬といふのであるが、蕃殖の成功を得る爲にはかういつた犬に頼らなくてはならぬ。牡犬は汎く蕃殖に用ゐられるので、優越遺傳力を有つものは、種族の爲一の系統的勢力を形成することが出来る。これを優勢血統といふ。

如何なる犬が優越遺傳力を有つかは、ほんたうのところ蕃殖の結果を見なければよくは分るものではない。しかしながら左の三點は或程度まで判斷の資料となる。

- 一、系統的に仕上げられた犬
- 二、外貌的に優れた犬
- 三、性徴の明かな犬

右の三點が備つてゐれば、優越遺傳力の犬とまではゆかなくても、比較的良い仔を産出するの確率が多い。だから若き種牝種牡を選ぶには右の三件は可なり有力なる参考となるであらう。尙注意すべきは、新種牡の能力を試す爲には從來蕃殖に用ゐられた經驗ある牝犬に依らなくては、とかく判斷を誤り易いといふことである。

外見的に立派な犬でも、比較的良い仔を産まない犬が敢て少くない。その原因にはいろいろのことがあるであらうが、系統的の固定性が足りないことに原因する場合が少くない。系統的に固定したもので、良い外貌を有つ犬は十中七八迄良い仔を産むわけであるが、今一つ大切なことは、牡は牡らしき、牝は牝らしき性徴をはつきりと有つてゐなくてはならぬといふことである。

何故に性徴がはつきりしてゐなくてはならぬか。元來動物の蕃殖といふことは、二つの相異つた性—即ち陽と陰—の相合することに依つて起る機發的結果であるから、その差がはつきりしたものでなくては、有力なる現象が發生するわけがない。このことは百獸の王たるライオンの如きは、牡は鬣を以て牝と區別せられ、これに反して下等動物になればなる程兩性の差別がなくなり、遂に兩性一體のものから蕃殖することに依つても領かれるであらう。我々の畜犬は肉體的にも精神的にも第一列の高等動物に屬する。だから性徴の區別が、人類程ではないが、随分はつきりしてゐるものである。もしこれがはつきりしてゐないならば、たとひその犬が犬としては立派な席次のもでも、種犬としては頼りないものと言はなくてはならぬ。私の信するところに依れば、外見的に第一列の出來榮えを有つてゐて、而も性徴のはつきりしないものよりも、外見的に

は第二列であつても、性徴のはつきりしたものの方が仔出しが良いと思ふ。

仔出しの良いといふ意味には二通りある。即ち多産であるといふことと、品質の良い仔を産むといふことの二つの意味があるが、この二つは結局相通するものである。蓋し良い犬は一般に多數の兄弟姉妹がある場合に出るものであつて、兄弟姉妹の數が少い場合には出現する確率の少ないものである。

牡にしろ、牝にしろ中性的相貌のものでは前に述べた陰陽の理からしても、多産であるべき筈がない。又生理學的に見ても、中性のものはホルモンの作用が完全でないといふことになるから多産であらうとは思はれない。

性徴の重要性に就ては可なり多く注意されてはゐるが、性徴そのものゝ見分け方に就ては更に研究を要するものがある。これに就ては次節に於て所見を述べたい。

第三節 性徴はどこで見分けるか

性徴は種族の特徴同様、その顔貌に明かに現はれるものであるが、やはり全貌上にもはつきりと現はれるものである。言ひかへれば、可なり距つた所からでも、それが牡であるか牝であるか

が容易に見分けがつ、やうでなくては性徴が明かであるとは言はれない。つまり種犬の性徴はその顔貌と全貌との両方面から観察すべきであることを強調したい。

一、顔貌 牝牝顔貌の相異に就ては、周知のことであるからあまり言ふべきことはないが、最も大切なことは：牝は充分威厳ある品位を現はし、牝はむしろ優美なる品位を有たねばならぬといふことである。この品位の相異はいろいろの點から生れるものであるが、その中で最も大切なことは頭蓋の幅である。一般に狭い頭蓋は優美ではあるが、威厳に乏しく、これに反して或る程度を超えて廣きに過ぐるものは粗野に傾く。これは血種の粗糙を表象するものである。勿論頭蓋の幅は犬種大種に依つて相異はあるが、牝の頭蓋は粗野に陥らざる程度に於て廣く、牝の頭蓋は優美なる品位を感ぜしむるだけに狭めなものでなくてはならぬ。これに違ふものは牝にしても牝にしても優良なる蕃殖成績を擧げ得ないのが一般である。

以上は無形の品位からの見方であるが、これを體形の方面から言へば、頭蓋の廣狹は頸の大小に比例する。最も多くの經驗に徴するに、牝にして頸の細めなものはたとへ各部の出來榮えが良くても、良い種牝ではあり得ないと共に、牝にしてすつきりした頸を有たないものは良い種牝ではあり得ない。このことは唯犬だけでなく、他の種畜に於ても同様であると信じられて

ゐる。

二、全貌 性徴から全貌を観るときは、體格と體様との二方面が考へられる。更に體格に就て言へば、骨格とサイズの二つの見方があるが、大體に於て牝は牡らしくその體格が逞しく、體様に於てもその線が太くなくてはならぬ。もつと詳しく述べれば：

(一)骨格 牝だからといつて骨格が細くてよいといふのではないが、牝の骨格はどこまでも頑丈味がなくてはならぬ。牝は四肢に於ても何となくすつきりしたところがある。これは凡てこの種動物を通じての天然の設計の然らしむるところである。較細い貧弱な牝犬が逞しい牝の補償を受けて逞しい仔を産むものであるとは言へないが、平凡な骨格の牝犬に、逞しい骨格の牝犬を交配して良い仔が産れるものとは尙更言へない。しかし牝が牝としてのあざやかさを持つものであるならば、牝の逞しさに依つて補償されるものであることは、天然の仕向けであつて何ら疑ひを挟むの餘地がない。

(ろ)サイズ 原則として牝と牝とはサイズが異なるものであることに就ては既に述べた。即ち中型犬に於ては、犬種に依つて多少の相異があるが、體高に於て四纏乃至六纏位(ドールベルマンは六纏、シェパードは五纏、エアデルは四纏)の差がなくてはならぬ。だから牝にして標準

の中位を下るもの、牝にして標準の中位を越えるものは漸次性徴を損することとなる。既に述べた通り、性徴を損じたものからは一般に良い仔は産れない。だから種牝は小さなものは繁殖価値が少く、之に反して種牝は大きいものが価値が少いといふのである。唯産れる仔のサイズだけのことならば、比較的小さな牝と大きい牝とを交配しても、それは中和されて程合ひのサイズのもの産れるであらうが、こゝにいふことは産れる仔の質に關しての成績をいふのである。

サイズに關する牝牝の繁殖価値に就ては一般に忽にされる傾があるが、理想としては標準の中位のもの尙ぶ。……兎に角「牝は標準中位より小さくしては種牝としての価値が少いが、牝は大きくては好ましくない」といふことを強記すべきである。何となれば、これは天然がこの種畜類の繁殖の爲に仕向けられた大切な要件の一であつて、これに逆らふものは理窟なしにそれだけの責罰を受けなくてはならぬことは、天理の然らしむるところであるからだ。

(は)體様　こゝに言ふ體様とは、姿態とか、肉附の様子とか、體線の感じとかを言ふのである。即ち牝は豪壯なる姿態を現はし、肉附も一段と引緊つて堅く、所謂大體の線が太くなくてはならぬ。牝は圓味を持ち一の曲線美を現はすものである。これは生理的に言へば性ホルモンの相異から來るものであるが、とにかくこの體様がそれぞれはつきりと現はれてゐなくては完全なる

性の機能を有つものとは言はれない。これを人類に就て見ればよく判る。性の機能の成熟しない児童や、性の機能の減退した老人は共に體様に於て男女の差異が少いではないか。

性機能の發達状態を直接判知し得るものに、牝犬の睪丸と牝犬の乳房がある。

睪丸は充分充實したものがよいことは言ふまでもないことであるが、最も問題となるものが隱睪である。兩隱睪は最も多くの場合無精であり、又は精子の不熟を來すものであるから、何人も問題なくこれを排斥するものであるが、單隱睪に就ては意見を異にするものがある。然るに近年これに關してワルテル・コツホ博士の深刻なる研究は、よくこの問題を解決するに足るものである。参考の爲に解り易くその要領を摘記して、隱睪犬は勿論その子孫の淘汰に關して強く諒解を求めたいと思ふ。

一、兩隱睪も單隱睪もその根本性質に於ては全然同一であつて、これは病的畸形に屬し遺傳をなすものである。だからこの系統の犬は絶対に排斥しなくてはならぬ。

二、隱睪犬は唯その畸形を遺傳するばかりでなく、明かに種族の退化を來すものである。蓋し直接現象としては、犬の性能上には別に悪影響がないかも知れないが、いつかは身體上にいろいろの缺陷が現はれるものである。だからこの系統の犬は現下性能に支障がなくとも、將

來のことを考へて絶対に排斥しなくてはならぬ。

三、隱辜の原因は腦下垂體の性ホルモンの作用の不全である。蓋しこの性ホルモンの作用なるものは、辜丸の移動・整調に役立つのみならず、性的活力の凡てをも指導するものである。即ち性的未熟、性慾不振、交配不能等は性ホルモンの不完全に基因する—だから隱辜は兩單いづれにかゝはらずこれを排斥しなくてはならぬ。

四、隱辜は遺傳法則に依る劣性(潜在)である。即ち隱辜犬の子孫には隱辜そのものが現はれなくとも、この忌むべき型質を潜在的に有つものがある。これは牝牝兩性とも同様である—だから隱辜犬の子孫は牝牝いづれにかゝはらずこれを排斥しなくてはならぬ。

右四項の摘出には多少私見を加へたが、大體に於てワルテル・コツホ博士の研究の結果は右の通りであるから、種族の健全なる發達を期する爲、兩單隱辜犬そのものは勿論、その子孫も亦隱辜であるなしかゝはらず、又牝牝いづれをも完全に淘汰しなくてはならぬ。

隱辜犬の子孫であるかないか分らないが、牝にして時々交配不能のものがある。これは多分性ホルモンの變調からであらう。だからこの種のもは人工授精までしてその子孫を後世に遺すことは大に考へなくてはならぬことだ。

これらの淘汰に關しては唯各個人の意思に任すことなく、蕃殖團體に於て統制ある規定を設けらるゝことが望ましい。

牝犬の乳房の状態は性徴に關係し、蕃殖價値に影響があることは言ふまでもない。凡て家畜に於て多乳のものは多くの仔を産み、多くの仔を産むものが良い仔を産む確率が大である。牝犬の乳房は元來十個あるものである。しかし、その全部が完全に發達してゐるものはむしろ稀であるが、少くも八個は完全に發達してゐることが望ましい。私の經驗によれば、甚しきは唯四、五個しかないものもあれば、その發達さへも不完全なものもある。かくの如き犬は、その體様に於ても充分なる性徴を現はしてゐないことが多い。それは牝犬の隱辜とは稍々趣きを異にするところがないではないが、性ホルモンが完全でないといふことや遺傳をなすものであるといふことに於ては、一脈相通するものがあるのではなからうか。兎に角、乳房の數の少い牝犬、乳房の發達がよくない牝犬は、種牝としての價値が少い。種牝の選擇に於ては勿論、審査に於ても乳房の状態を調べるの必要があるであらうことを茲に提唱するものである。殊に種犬認定試験に於て然りである。

牝犬の體様に就て今一つ大事なことを擧げなくてはならぬ。牝犬の頸は比較的すつきりした

ものでなくてはならないが、これに反して胸は容量の大なるものが好ましい。

しかしながら注意を要することがある：牝犬は多少胸の長めなものがよいと、よく言はるゝところであるが、私はこれに就て異見を有つものである。といふのは、私が短胸種に依る私自身の蕃殖の経験に依るも、周囲に就ての觀察に依るも、短胸の牝犬なるものは、毫も蕃殖の成績を害するものでないことを確認するからである。即ち胸のつまつた牝犬は仔數に於ても仔の質に於ても何ら悪影響を受くることなく、否、むしろ優秀なる成績を擧ぐるものである。このことは長胸種にあつて同様であるべき筈だ。唯長胸種にあつては、母犬の胸の長めなことから來る遺傳が、仔の爲に左程悪結果とならないといふことだけは言へるにしても、これを歓迎する程のことはい。それよりも大切なことは胸の張りにゆとりのあるといふことである。その理由は妊娠犬の腹の状態を觀察しただけでも了解されることと思ふが、妊娠犬の腹は先づ肋骨の直後が横に張り、それから下に垂れるものであつて、腹の後部は比較的膨れないではないか。試に他の種畜に就てこれを觀るに、頭蓋と頸の比較的すつきりとした、胸の張りにゆとりのある牝獸は多乳の象徴であると信じられてゐる。犬にあつては多乳は多産に通じ、多産は良い仔を産むことに一致するのである。

第四節 年齢と蕃殖成績

犬の年齢は蕃殖成績に大に影響するものであることは何人も知つてゐる。未成熟の犬を以て蕃殖を行ふことは勿論よいことではないが、しかしこれに拘泥するのあまり、牝犬をして無駄に蕃殖の好時期を空過せしむるものがありはせぬか。今年齡から見ても我國では犬の一生の最高點を滿四歳とすれば、凡そこの最高盛期に至る迄に三胎仔を擧げしむることが望ましい。凡そ動物は壯年時に於ての蕃殖が最も天理に即するものであることは議論の餘地なきところである。だから牝犬は四歳頃までに種牝としての最も效果的の使命を果すものである。これが爲には滿二歳前後に第一回、滿三歳前後に第二回、滿四歳前後に第三回といふ見當で行へば、發情を一回おきに實施することとなり、母體の爲にも産仔の爲にも最も良い結果を齎らすものである。それ以後は、今二回位は好結果が望まれないことはないにしても、概して産仔の出來榮えが甚しく遞下するものである。如何に良質の種牝であつても年齢上、下り坂のものでは好結果を擧げ得る確率は少い。若い時良い仔を産んだ牝犬でも、信頼できるのは唯三四回と思はなくてはならぬ。早婚を獎勵せらるゝのは、唯戦時下であるといふことだけではない。或る外國での統計に依るに、我々のいふ

蕃殖適齡前のもので優勝犬を生んだものは比較的多いといふことは確に研究する値がある。

第五節 榮養と蕃殖成績

茲にいふ榮養とは適正な食餌を與へ、適正な運動を課して得らるゝところのほんたうの榮養をいふのである。この意味に於て榮養の良いものは、牝にしても、牝にしても良い仔を産むものである。

榮養の不足はその仔を貧弱ならしむるものであることは解り易きことであるが、榮養の過多も亦その仔を貧弱ならしむるものである。甚しきは不産にさへも陥らしむることが決して尠くない。

今試に農業種畜に就てこれを觀るに、蕃殖期が近づけば種畜の榮養を高めることに依つて好結果が得らるゝものであると、一般畜産家に依つて信じられてゐる。しかしながら、この意味を誤つてはならぬ。この榮養を高めるといふことは、種畜を過肥の状態に置くといふ意味とは違ふ。蕃殖前又は蕃殖中榮養を高めるといふことは、生れる仔の爲に、それだけ多くの榮養を母體を通じて與へる意味である。元來榮養を良くするといふことは一年を通じてこれを行ふべきもので、

俄ごしらへでは充分目的を達するわけのものでない。

過肥はその原因が何であらうと、大體特に内部生殖器に脂肪を蓄積せしむるものであるから生理的に生殖機能を減退せしむるものである。

一旦過肥に陥つた犬は漸次これを規正しなければならぬ。俄にこれを引下げるとは、過肥であることよりもむしろ害がある。又規正の見當に就て注意しなければならぬことは、外觀的に脂肪がとれ恰度良くなつたやうに見えても、内部的にはまだ容易に脂肪がとれるものでないといふことである。これは長く過肥状態に置かれた犬に於て特に注意すべきことである。かくの如きものに對しては、一旦瘠せてみえる迄榮養を下げ、然る後常態に復歸せしむべきである。

種犬は決して瘠せてみえてはいけない。理想からいへば、食餌を高め、運動を充分に課することによつて、所謂堅肥えの状態に置くべきである。しかしながら、これ亦その意味を誤つてはならぬ。無闇に食餌を高め、無闇に運動を多くすることは屢々徒勞に屬し好結果を得るものではない。殊に思ひ出したやうにこれを行ふことは面白くない。原則としては一日も怠ることなく、平衡した食餌と運動とに依つて堅肥えの状態を常に保たしめなくてはならぬ。即ち常時鍛鍊法の主旨に従つて、筋力と肺力との發達を期して常に肉附を適正ならしむることが、種犬

の爲には必要な條件である。

實役犬の爲には、常時鍛鍊法の外に、臨時に高度の目標を定め、これに打ち克つ如く鍛鍊するの必要があるが、一般種犬としては強ちその必要はなく、常時鍛鍊法に依つて根柢的の體力を附與して置けばよいわけである。常時鍛鍊法とは、適度の速度と時間とを配合したものを運動の爲の一鎖と定め、犬の状態に應じて一回にこの鎖を何回か反覆することに依つて體力を鍊成する方法をいふ。言ひ換へれば、過劇強行的でなく平調的にして而も根強き強健法でなくてはならぬ。臨時鍛鍊法とは、例へば八里を二時間に突破するといふ如き強行的目標に向つて鍛鍊するものであるが、これとても急劇に仕向けるものでなく、もし急劇に仕向ければ害こそあれ利なきものである。そしてこれは主義として種犬の爲には望むところではない。

第五章 自然變異

第一節 遺傳との對立

或る人は曰ふ…遺傳に依つて出來たものは、後天的には何ともなるものでないと。果してさう

か。私の信ずるところに依れば、犬の改良—良い犬を作る—といふことは、勿論交配の選擇に依つて人工的に良い遺傳を導き入れることに大なる根據を置くものであるが、他の一面に於て自然變異の力を借りて良い變化を導き入れることにも待たなければならぬものと思ふ。

凡ての生物は遺傳に依る素質の外に、自然變異なるものゝ影響を受けて出來上るものである。自然變異なるものは母親の胎内にあるときにも起るものであるが、生れ落ちた後にむしろより多く起るものである。これは兄弟二頭の犬がよしや全然同一の遺傳を受けて生れたとしても、全然同一に出來上るものではないことでも解る。

もし自然變異なるものがないとすれば、凡ての動物は親乃至はその祖先よりも一步でも進歩することはできない筈だ。然るに實際に於てはそれぞれ多くの進化を來してゐる。これ即ち自然變異なるものがある證左である。しかしながら、自然變異なるものはいつても我々の望む善い方向に向つてのみ起るものではなくて悪むべき方向に向つても變化を起さしむるものである。所謂退化の主なる原因は悪むべき變異を放任して置くことである。

そこで、自然變異なるものは何によつて起るのであるか。我々の知り得ない天の力に依つて起るものもある。例へば長尾の犬種に於て突然無尾のものが生れる如き、これに就て我々は從來持

つてゐた遺傳因子を喪失したからであると説明することはできても、何故に喪失したかは説明することはできない。しかしながら、普通現はれる範囲内の變異は、親なり、仔なりに對する環境の變化に原因するものであるといはれてゐる。即ちクエテレットに従へば：所謂波動（高低）變異なるものは、遺傳因子が異なるわけではなくて、遺傳因子それ自身の活動の程度に變化があるからであり、その原因は榮養の高低に依るものであると。茲にいふ榮養とは天然の環境と人爲的待遇の二つに關するものである。天然の環境だけでは、地球上かけ離れた土地への移動の如き場合には、可なり大なる影響を受けることは言ふまでもないが、一定地域内に於てはこれに依つて著しき變異を來たすものとは思はれない。何となれば一地方の野生犬を見ても、彼らの間に起る變異極めて緩漫にして微々たるものであるからだ。畢竟我々の家犬に於て今日迄に起つた高低の變異、主として人爲的待遇の結果であるといへる。

家犬や家犬の蕃殖力やサイズが増したのも、人爲的待遇の然らしむるところに外ならない。されば今日我々の畜犬に於ても待遇次第で、蕃殖力やサイズの上に變化を與へ得るものであることは言ふを俟たない。

ネーリングに従へば、狼は縛られてゐると、既に第一代に於て全體の頭蓋骨の大きさ及その

比例、特にその齒の大きさ、形及位置に於て如何に變化さるべきか驚く程であるといふ。我々の畜犬が食物や運動の仕向け方に依つて、頭蓋骨よりも、もつと變り易き他部の形狀に一層大なる變化を來すであらうことは推測に難くない。

以上は蕃殖力やサイズや體形に關しての變異に就て述べたのであるが、心的方面の變異に關しても同様である。否、それ以上であると言ひたい。犬はこれを飼ふ人に依つてその性格が變るものであり、訓練に依つてその稟性が強化されるものであることは、今更言ふまでもないことである。

これを要するに、良い犬を作らんとする人が、唯遺傳—交配の選擇—にのみ頼らんとするならば、よくその一半を贏ち得るにしても、その一半に於て失敗を意味する。この意味に於て、蕃殖獎勵賞なるものを認めるからには、育成獎勵賞なるものもあつて欲しい。蓋し我國の一般を通じて、仔犬は普通離乳後間もなく蕃殖者の手を離れ、新なる育成者の手に依つて育て上げられるものであるからだ。

それはそれとして、優秀犬を作出するといふことは、合理的に交配を選擇すること、合理的に管理を行ふことに依つて、はじめて目的が達せらるゝものである。即ち遺傳と自然變異なるも

のは、作出上相對立する二つの力であることを忘れてはならぬ。されば、合理的の管理とは如何なることを言ふのであるか、こゝに詳述する邊はないが、既に多くの有識者に依つていろいろの書物も著はされてゐるし、私としても拙著「犬を飼ふ秘訣」の中にその原則だけは書いて置いたつもりであるから、茲にはこれを省略する。

第二節 順應性と種の改良

我々の觀察に従へば、犬ほど自然變異の烈しい動物は他には恐らく少いであらう。その證據としては、同じやうな家畜である猫には種類が少ないが、犬にはその種類が極めて多くて多いではないか。蓋しこの種類の多いといふことは一面、交雜に依つて新種が作られたことにも依るが、その根本に於ては自然變異の結果に外ならない。否らざれば猫と同様新しい種類は左程出来るものではない。例へば原始的のグレーハウンドは立耳であつたが、自然變異が起つて半立耳のものが出來た如き、有尾のシーブドッグから無尾のものとなつたが如き、かの獨逸スピッツから英國で小さなボメラニアンが出來た如き、いづれも他種との交雜に依る結果ではなくて、自然變異の結果であることが立證される。言ひ換へれば、各種大小のサイズ、各種變つた毛色、長短曲直各種

の脚、各種の耳、各種の尾等その根源に於て一として自然變異に依らないものはない。更に廣く考へれば各様各種の性能のできたこともこれ亦自然變異の結果である。即ち軍用に適するもの、獵用に適するもの、輓曳に適するもの、愛玩に適するもの等々その性能や性格の差異に就ては枚舉に邊がないが、これらはいづれもその境遇に依つて自然變異を來たした結果である。

こゝに言はんとするところは、自然變異に依つてできた新なる型質―體形だけでなく稟性―はこれを子孫に傳へ得るものであるか、どうかといふことである。波動變異に依つて漸進的にできたものが遺傳するであらうことは、何人にも解り易きことであるが、突然變異―例へば突然の無尾―でさへも遺傳するものである。これが遺傳すればこそ無尾の犬種ができ、垂耳の犬種ができたのである。

だから結局、自然變異なるものは祖先からの遺傳を破壊するものであるが、新に起つた變異は遺傳に依つて子孫に傳へられるものである。即ち蕃殖上の注意さへ行届けば、悪い變異はこれを淘汰し、善い變異はこれを取り入れ、これを固定―多くは近親蕃殖―して次代次代に遺傳せしむることに依つて犬種の改良ができるわけである。言ひかへれば、遺傳と自然變異とは相對立するものであると共に、相交流して動物の進化に役立つものである。

本節に於て論じなくてはならぬことは、順應性に就てであるが、犬に自然變異が起り易いといふことは、言ひ換へれば、犬なる動物は順應性に富むものであるといふことに一致する。蓋しそれぞれ與へられたる境遇——天然の環境と人爲的の待遇——に順應すればこそ、これに應ずるやうに變化するのである。もし順應する力がないものとすれば、境遇の變化に抗し得ずして種それ自身が退化滅亡を來すであらう。

そこで、我々は有能なる犬を作るといふことに、異つた二つの理念があることに気付くであらう。即ちその一は全然遺傳一本鎗で従來通りの有能なものを作るといふこと。今一つは變異性を利用して従來のものよりもより進歩したものを作出するといふことである。顧みるに、我々の三大種はそれぞれ原産國に於て使役犬として卓越した性能を持つものではあるが、果して我々は輸入そのまゝのもので何の不足もなく満足するものであらうか。よしや満足しても輸入そのまゝのものをいつまでも變へることなく持ち続け得るものであらうか。これを持ち続ける爲には、合理的の交配に依る確實なる遺傳の力に依ると共に、自然變異の原則から二つの要件が充足されなくてはならぬ。その一つは天然の環境が同一であるといふこと。その二は人爲的に與へる待遇が同一でなくてはならぬといふこと。この二の要件が同一にできなければ、いくら合理的に交配を仕

向けても、最初輸入したそのまゝの情態を持ち続けることは出來ないものであることを知らねばならぬ。

天然の環境とは氣候風土を始め、犬に影響する天然の凡ゆる勢力をいふのである。これは我國と西洋とは同一であるとはいへない。多くの學者の所信に従へば、馬に於て、本來の亞細亞産のものとは本來の歐洲産のものとの輕重の差異は、唯氣候風土の關係だけで自然に變異してできたものと言はれてゐる。犬は馬よりも變易性の強いものであるから、氣候風土の變化による變異は一層大であることは想像に難くない。

人爲的の待遇はそれぞれ原産國で與へられた通りに踏襲すれば踏襲できないことはないが、それとても實際に於ては、いろいろの關係で同様に待遇するといふことは先づできないことである。就中我々日本人と西洋人とは性格的に大なる差異があるのであるから、善いか悪いかは別としてそれだけでも犬に及ぼすところの影響は決して少くない。

以上を綜合すれば、天然の環境は勿論、人爲的の待遇に於ても原産國のそれとは大なる相異があることは到底免れられ得ない。果して然りとすれば我々の三大種に於ても自然的に變異の起ることは見易きことである。このことは我々にとつて果して悲しむべきことであらうか。私をして

言はしむれば、この變異性があればこそむしろ仕合であるといひたい。何となれば、いくら原産國で良いと考へられてゐるものでも、必ずしも一々我國には適しないものがあるからだ。

時々聞くところであるが、日本には日本のシェパードを作らなくてはならぬと。これは如何なる著眼の下に言はるゝのであるか、その理由を聞かないから知る由もないが、この言葉には確に大切な眞理が含まれてゐる。唯注意しなければならぬことは、我々の蕃殖法が粗末である結果、粗末な犬しか出来ないが爲に、その遁辭としてこの美言が利用されてはならぬといふことである。

されば、どの點を改良すべきであるか。私の信ずる主要な點を擧ぐれば：

一、氣候風土に馴致すること
二、日本の食物に馴らすこと

畢竟體質を日本的に強化すること

一、氣候風土に馴致すること　これは自然にできることであるが、これとても實際に於ては相當の注意を要することである。輸入の當初に於ては、即ち輸入犬は勿論その子に對しては急劇な變化を與へることは勿論よくないことであり、むしろ相當の設備に依つて保護を加へなくてはならぬが、最早今日となつては特別の保護を加へずして簡易なる犬舎で飼はれなくてはならぬ。一

例を擧ぐれば、關東地方の氣候に於ては、冬期間といへども寢蓐を用ゐない程度に迄馴致されなくてはなるまい。

二、日本の食物に馴らすこと　これは今日の戦争下に於ては食糧資源の關係から自然制限を受けることとなるから、別に言ふべき必要はないが、全體原産國に於ては獸肉類が比較的多く給與せられたものであるが、我國ではこれに代へるに魚屑が用ゐられなくてはならぬ。そして種犬といへども、一頭位はいろいろの殘物で飼はれるやうに漸次仕向けなくてはなるまい。

これらは軍事上將又一般の必要から迫られた理想であるが、血種を低下することなくこれに馴致することは却々容易なことではないと思ふ。しかしながら、よく考へてみるに、元來犬は食肉獸であつたものが、いつの間にかやがて雑食獸となつたことを想へば―そして世界到る所に於てその住民と同じ食物に馴致せられ、いろいろの待遇の下に各種の用役に使はれてゐることを想へば、決して不可能事ではないと信ずる。これが犬なる動物の持つ天賦の特質であつて、世界到るところに犬が存在するわけである。勿論その爲に體形等にも多少の變異を來たすであらうことは覺悟しなければならぬ。しかしながら、變異必ずしも悪方面ばかりではないのだから、我々は悪方面の變異はこれを淘汰し、善方面の變異を捕捉して漸次日本的のものを積み上

げて行く考へで進まなくてはならぬ。いづれにしても、いつまでも何ら變異がなくて済むものであると思ふものこそ、知らず識らずの間に、救ふべからざる魔の深淵に陥りつゝあることを、この際速に覺醒しなければならぬ。これが爲には逐次方針の決定を要するであらうし、協力一致をも要するであらうことを力説するものである。

シエバードに就ていへば、體質の改善を要することは何人も認むるところであつて、これに就ては第一篇に於て述べた如く抗病力の強化―部分的には眼の色素と齒質の改善等―である。この改良の爲には勿論蕃殖上遺傳方面の選擇を嚴にすることに依らなくてはならぬが、畢竟、我が氣候風土に適應するものだけを養ひ育て、これに適せざるものは如何に他點に於て見所があらうがどしどし淘汰して一日たりとも我々の犬舎を彼らに貸さないといふことが最も効果的な捷徑である。

エアデールやドーベルマンに就ていへば、軍用犬的の訓練性に於てエアデールは他人に馴れ易いものが少なくなく、ドーベルマンは剛愎なものが少ないといふやうに稍物足りない點がある。この程度の缺陷は注意さへすれば、飼ふ人々の性格を通じて漸次改變できるものであらうが、徹底的にどの犬に對しても訓練を加へ、多くの世代を待たずして善方面への變異を招來することに努めなくてはならぬ。

エアデールやドーベルマンは、何といつても、シエバードに比すれば軍用犬的訓練が浅いのでそれだけ習性的に強化されてゐない點があるのは止むを得ない。だからこの點を了解して、訓練を充分に施し遺傳的に訓練性を固めることがシエバードに於けるよりも一層必要であると思ふ。第一篇で述べた通り、習慣は一の習性を作り、習性はこれを固むれば稟性となつて、子々孫々にまでこれを傳へることが出来る。近時醫學界の學說に従へば、教育に依つて與へた技能はその子に遺傳するものでないといふことに概ね一致してゐるが、それとこれとは異なるもので、たとへ習つた技能そのものは、そのまま遺傳されるものでないにしても、それに向く素質だけは遺傳せらるゝものであることは、既に述べたところ―例ポイントのポイント―に依つて何ら疑ふの餘地がない。

第六章 淘汰

淘汰とは有害無益なものを間引き棄てることをいふ。如何に良い種を蒔いたつもりでも、全部

が全部立派な苗とはなり得ないやうに、犬の蕃殖に於ても、理想の交配を行つたつもりでも、生れる仔は全部揃つて良いものとはなり得ない。それは既に述べたやうに、遺傳の偏差とその外に自然變異が起るからだ。

良農は種子を選択すると共に、不出來な苗は間引き棄ることを怠らない。良蕃殖者もかくあらねばならぬ。しかしながら、同じ生命を持つものでありながら、植物と動物とではこれに對する人情が違ふ。これが爲淘汰がしばしば躊躇せられるのは無理からぬことだ。こゝに言はんとするところは、これに就てどうすればよいかといふことである。

生れると直ぐ思ひきつて實行するといふこと……これは極めて平凡なことではあるが、淘汰に關しての私の最大なる主張である。

最大の主張たる——生れると直ぐ思ひきつて淘汰するといふことは案外實行し易いことである。蓋し死んで生れたものと思へば、それに近い人情で實行することが出来るからだ。そこで問題となることは、生れ落ちると直ぐ良いか悪いかの鑑別がつかどうかといふことであるが、それは神様でない限り精密にできるとは言はないが、大體の見當はつくものであると云つてよい。殊に我々の使役犬にあつては、他の翫賞犬とは異つて、心身の健全であるといふことを第一要素とす

るものであるから、それに主眼を置いて淘汰すれば、その選り分けは困難でなく、且又犬種養成の主旨にも副ひ少くも犬種の爲に後害を残す虞が少い。その他は父母の遺傳に信頼して、その信賴の程度に應じ、父母犬の美點と缺點とを参考として淘汰すれば大體に於て誤りはない。これに就てもつと詳しく述べるであらう。

明かに標準に合せざるものと虚弱のものを去る——明かに標準に合しないものといふのは、不具のものや毛色が標準に違ふものは勿論、常識に訴へて標準ばなれのしたものをいふのである。それと共に虚弱なものは唯の頭も残さず思ひきつて取り去らなくてはならぬ。それはどういふ意味であるか。

虚弱のものとは元氣のないもの、身體の充實味の乏しいもの——即ち乳房に喰ひつく力の足りないもの、胴まわりが細くて身體の緊張性の少い、握つてみて軟かな感じのするものをいふ。虚弱であるかないかは比較的問題であるが、使役犬であるからこの點に最も重きを置き、少しでも弱いと思ふものは悉く間引き棄てゝしまはなくてはならぬといふのが私の大なる主張であるのだ。蓋しこれと思ひきつて實行することが、將來犬種全體の體質と氣力とを強化する爲の根本的基礎をなすものであると固く信するからだ。尙これに就て注意したいことは、とかく人情の常と

して、體形が良いからといふことに迷つて、頑丈味の足りないものでも、残すことがありがちであるが、これが犬種の將來に對して大害の原因をなすものであることを銘肝しなくてはならぬといふことである。概してこの種虛弱仔なるものは、將來たとへ外觀的に體形だけは立派なものとなつても、根本的に頑丈味や抗病力が弱く、又氣力の足りないものとなる。而もかういつた犬が將來體形の良さに依つてとかく蕃殖に使はれがちとなり、その結果、犬種の體質や稟性の強化をいつまでもいつまでも妨ぐることとなる。何と恐るべき禍根ではないか。もし虛弱仔や準虛弱仔を育て上げて誇りを感じるものがありとすれば、思はざるの甚しきものと言はなくてはならぬ。

近頃は管理上の手當法や醫術の進歩に依つて、虛弱仔でさへもよく育て上げ得るものであるが、右の見地からすれば、それはむしろ犬種を墮落に導くものであると言ひたい。これは種犬の少い時代には止むなきこととして諒としなければならなかつたが、最早今日となつては、初生仔の中に唯一頭でも頑丈味や元氣に缺けたと思はるゝものが残されてゐてはなるまい。抑も頑丈仔の見分け方は多くの經驗に依らずとも、何人にも容易にできることであるから、この主旨さへ了解せらるゝならば、この方法は最も行はれ易く、最も效果的の淘汰法と言はなくてはならない。

仔が産れると直ぐ、この淘汰法が徹底的に行はれ、著しく標準はづれでない頑丈仔だけが後に残るものとすれば、その出來上りが優秀であるかないかは別として、將來種族の爲に後害を貽すことは蓋し少いであらう。何となれば、體形的には充分恵まれないものがあるにしても頑丈味や氣力に於ては問題がないものであるから、それぞれ實役に充てるに足るからだ。そしてこの場合の不出來のものは體形上の觀點から種犬として用ゐらるゝ場合が少いであらうから、このことは却つて種族の爲に仕合である。元來我々の蕃殖は一般犬種の蕃殖とは異つて、唯頭抜けた優勝犬を作るといふことだけが目的ではない。むしろ一般としては、實役に充るに足る多くの有能犬、心身の頑丈犬を作り出すことを目標とし、一方この多くの犬の中から眞の種犬乃至は種犬の種犬に値する犬が出來ることを念願しながら進むものであるのだ。右の淘汰法はよくこの目的にも合致するものであることが解るであらう。

仔犬の淘汰は極めてむづかしいものであるとか、淘汰の時期は生後何ヶ月めと何ヶ月めとがよいなどと言はるゝが、それは一般犬的仔犬の選擇法——一寸一分でも體形の良いものを見分けることを主とする場合のことで、我々の使役犬に於ける淘汰法——有害無役のものを後に残さないといふ眞の淘汰とはその意義を異にするものであることを強記したい。

私の唱道する淘汰法なるものは、將來普通の展覽會に出せば多分優秀地位を獲得するであらうと思はるゝものでも、弱體質(多くは弱氣力を伴ふ)である限り、種族の禍根を絶つ爲、生れると直ぐ葬り去つて何ら悔むことのない奉公的方法であるのだ。滅私奉公が透徹する今日これが行はれない筈はなからう。

結 言

いくら良い犬種でも我國に飼ひ、我國に使用するには、我國の環境と我國民性としつくり合致しなければならぬ。これが爲には各犬種の有つ特徴を充分に認識して、我國の爲に改良を要する點には充分改良を加へなくてはならぬ。凡ての外來物に於てその通りであるが、犬は器械でなく動物であるのだから一層このことが肝要である。

動物は遺傳を裏切つて、外界の何事にも感作を受けて變り易いものであるが、幸にして犬は動物中新なる境遇に最も馴致され易いものであるから、この貴き順應性を善方面に利用するならば日本の軍用犬が出來上ることは甚しく困難な事ではないと思ふ。

これが改良の爲には二つの法則に據らなければならぬ。その一つは遺傳の法則であり、今一つは自然變異の法則である。自然變異は避くべからざるものであつて、殊に環境を異にする場合にはその現象が大である。變異の現象が小なる場合には、交配の選擇に依つて依然原型そのまゝを保持し得るものであるが、現象が大である場合には容易にこれに對抗することはできない。だから我々は避くべからざる自然變異は何であるかを考へ、良い方面のものと悪い方面のものとを區別觀察して、善い方面のものを取り入れることが、むしろ日本の性格のものを創造するに役立つものであることを強記しなければならぬ。

この創造には固定を要する。固定の爲には二つの方法が考へられる。その一つは同一血種の重積法であり、今一つは淘汰法である。

同一血種を重積するには同一系統の蕃殖に依らなくてはならぬ。就中最も效果的のものは近親蕃殖である。近親蕃殖といへば古くは毛嫌ひせられたものであるが、近代有能の家畜の最も多くのもはこれに依つて進化固定せられたものであることは、家畜系統史に徴しても明かである。だから近親蕃殖なるものを一も二もなく忌避するといふことは、今日としては時代遅れの甚しきものである。近親蕃殖は種族完成の道であると言はれ、科學的蕃殖法であるとさへ言はれてゐる。

近親蕃殖に對して警告を唱へるのはよいが、それに依つて徒に恐怖心を喚起せしむることは大に慎まなくてはならない。唯近親蕃殖に於て守らなくてはならぬものは何であるかを明かにして、これを嚴守することだけが肝要である。その守らなくてはならぬことは、當該章下に於て述べて置いた通りである。

悪質は良質を驅逐する。如何に日本的性格のものを創らんとしても、又創つたとしても悪質の種が別に蔓つたのでは、良種はいつか驅逐されてしまふ。だから絶えず悪質を淘汰しなければならぬ。悪質として我々の認める最も著しきものは、弱體質と弱氣力である。元來淘汰は極めて難事であると人はいふが、これに就て私は最も實行し易き、最も効果的方法を提唱して置いた。それを一言にして言へば、生れた仔を手で握つてみて「軟かい仔」は悉く眼を閉ぢて棄てしまへと言ふに盡きる。これを行ふには經驗を要しない。唯蕃殖者の責任觀に訴へるだけのことだ。

物を實用一點張りで観ることは最も多くの場合過誤に陥り易い。殊に犬は人間と心的方面に於て至大なる交渉を有つものであつて、これ程交渉の深いものは凡そ他に類例がないといつても敢て過言でなからう。この意味に於て犬は文化の一指標といつてよい。果して然らばこれを實用一

點張りで観ることは尙更できない。刻下の實用に重點を置かなくてはならぬことは當然のことであるが、悠久性といふことも考へなくてはならぬ。

第一、犬には我々國民性に合致するだけの品位がなくてはならぬ。品位のないものは文化人には好まれない。好まれないものを作るといふことは、殊に人間と心的交渉の大なる動物に於て失敗を意味する。況んや眞の品位なるものは、性格を代辯するものであるに於てをや。

同じ實用的に物を観るにも、我々と西洋人とは自ら觀方が違ふことがある。「眼」に關してこのことを痛論して置いたが、それは唯眼だけのことではない。今や皇國は凡ゆる事物に對して、日本的性格の顯揚に至大なる覺醒を遂げつゝあるではないか。この秋に方つて外來犬事に對しても檢討を要することは當然であるので、極めて短見ではあるが、篇中の各所に愚見のかづかづを披瀝して置いた。

もしそれ、これらが諸賢の參考に値するであらうならば、著者の欣幸これに過ぐるものはな

軍用犬新論

(○四六〇一い號番認承)

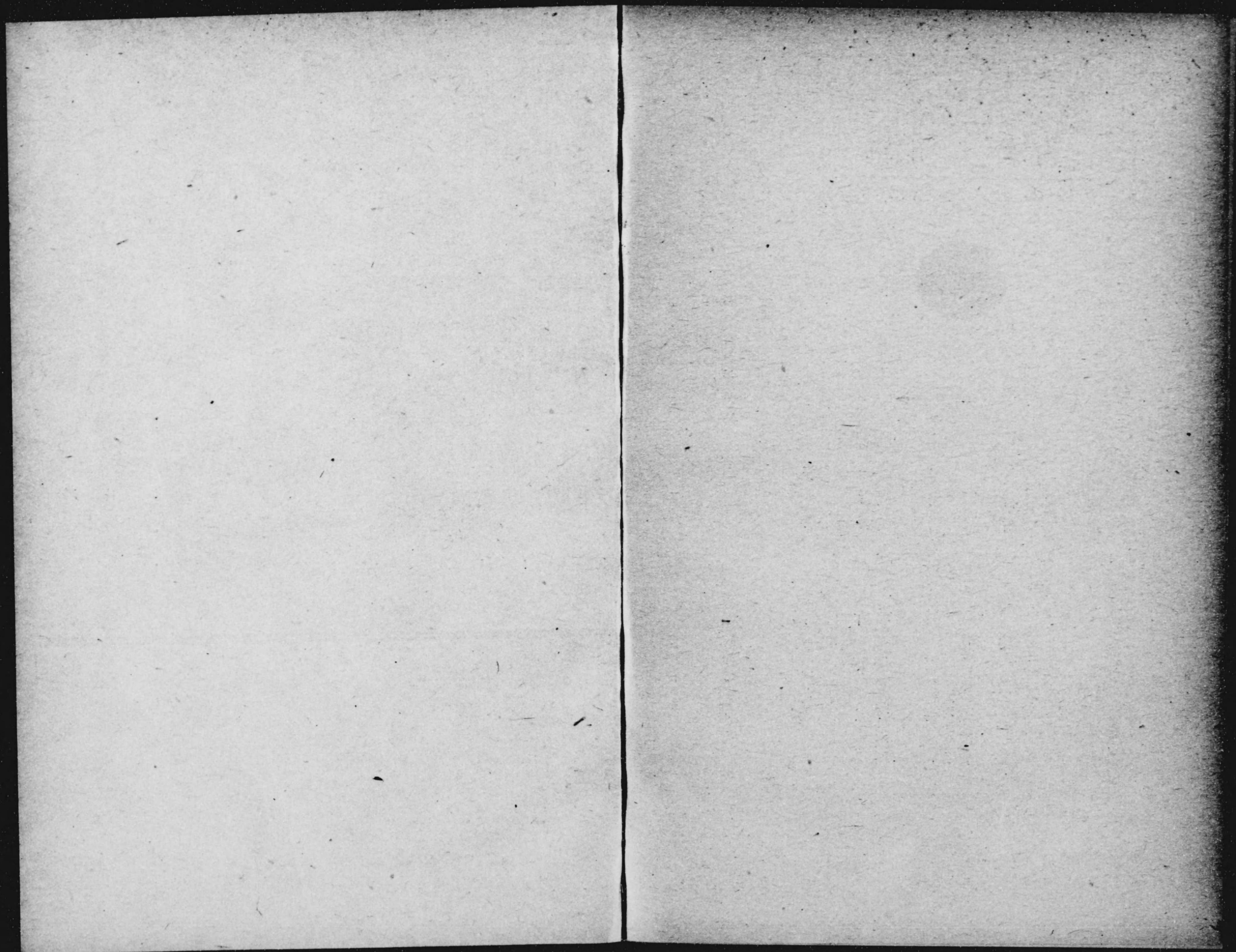


昭和十九年一月廿日 印刷
昭和十九年一月卅日 發行
行(二二〇〇部)

配給元	發行所	印刷者	發行者	著者
日本出版配給株式會社 東京都神田區淡路町二ノ九	犬の研究社 會員番號一〇二〇二二 東京都世田谷區若林六一〇 振替東京五〇三七九	活文會 横山 喜助 東京都神田區美土代町二二三	白木正光 東京都世田谷區若林六一〇	今田莊一

◎定價 貳圓四拾錢
特別行爲稅相當額 貳拾錢
賣價 貳圓六拾錢
送料 拾五錢

所本製山丸 町樂猿區田神 本製



969
100

